平成２７年度
スーパーグローバルハイスクール
研究開発実施報告書（第１年次）

札幌日本大学高等学校

はじめに

平成２８年３月吉日

札幌日本大学高等学校長　浅利　剛之

札幌日本大学高等学校が，昨年スーパーグローバルハイスクール（ＳＧＨ）に指定されまして１年が過ぎようとしています。２年前に始まったＳＧＨ事業の初年度はＳＧＨアソシエイト校に指定され，そして昨年２回目の申請で念願のＳＧＨ指定校となりました。

札幌日本大学高等学校は名前の通り全国に２５あります日本大学の付属校の一つです。１９８７年に開校した学校ですが，創立１０周年の１９９７年にオーストラリアに３校，カナダに２校と姉妹校提携を締結しいち早く国際交流を取り入れました。国際交流を始めてから２０年が経ちましたが，現在は北海道において国際交流の草分け的な存在として，ますます交流が盛んになっているところであります。以上のような歴史をもつ中で，ＳＧＨ指定・実践は一つの大きな目標で，指定の知らせは念願が適った瞬間でした。しかし一方で，ＳＧＨ指定校になって国から予算をいただいているという責任を，教育課程の開発をするということと同時に，将来日本を牽引するグローバルリーダーの育成をすることと解釈し，日々試行錯誤しながら学校一体となって奮闘しております。

また私が校長を拝命した４年前から，育成人材像を「世界に貢献する人」と位置づけ，世界に調和し，協調できる人間性と，待ち受けているであろう困難に打ち勝つことが出来る精神力と実力を兼ね備えた人材を育成することを目標に掲げました。日本は資源の少ない国です。地球全体をフィールドにしたグローバルな展開をしていくことのみが，日本が生きていく道だと考え，ＳＧＨ事業は本校教育の中核事業と位置づけ実践しております。

まず，初年度は中高一貫コース１年生６９名全員を対象とし，探究基礎といった設定科目を設置し，この時間をＳＧＨ事業の核としました。探究基礎では，本校の研究テーマである北海道の観光・食・北方領土・戦後７０年を中心にした講義やグループワーク，ワークショップ，パネルディスカッション等を実施しました。その際，できうる限り外部の専門家の講師をお呼びして，本物に触れさせる機会を創出し，グローバルマインドの向上に注力しました。また，国内研修として秋田の国際教養大学訪問，海外研修として北海道と連携を強化しているシンガポールへの訪問を実施して，研究テーマの知識を幅広く吸収してまいりました。さらに，高校生模擬国連やトビタテ！留学ＪＡＰＡＮのような課題研究外の活動も積極的に実施，推奨してきました。そして，グローバル人材に不可欠な英語力向上の新しい取り組みもスタートしています。

この１年は，苦労の連続でしたが，生徒の意識が変化して，研究の取り組み方が積極的になり，大きな手ごたえを感じることができました。また，教員の指導法の変化，指導力の向上も肌で感じられました。指定２年目となる次年度は，１年目の経験を踏まえ，ＳＧＨ事業をさらに広く，深く，学校全体に浸透させ，課題研究を中心に，さらに内容を発展させたていきたいと考えております。

最後になりましたが，１年目の活動をまとめた本報告書が，グローバルリーダー育成の教育課程や学習指導に，多少なりともご参考になれば幸いです。また，本校のＳＧＨ事業にご協力いただいた関係の皆様に御礼を申し上げると共に，さらなる充実に向けて忌憚のないご意見を承りますようお願いを申し上げ，はじめの言葉といたします。

目　次

Ⅰ．研究開発の概要　・・・・・・・・・・・・１

１．実施期間
２．学校の概要
３．研究開発名
４．研究対象生徒
５．研究開発にあたって
６．研究開発の目的・目標

Ⅱ．研究開発の内容　・・・・・・・・・・・・２

１．課題研究の取り組み
（１）教育課程
（２）教育課程内の取り組み
（３）教育課程外の取り組み
２．英語力向上の取り組み
３．グローバルマインド向上のための取り組み
（１）教科での授業改善
（２）海外校との連携・海外留学支援
４．成果の発信・広報
（１）学校ホームページ
（２）ＳＧＨ通信
（３）シンポジウム等への参加・学校視察の受け入れ等

Ⅲ．目標の進捗状況・評価　・・・・・・・・・・・・２１

１．生徒の変容
（１）意識の変容
（２）能力・技能の変容
２．教員および学校の変化
（１）グローバル人材育成に対する意識
（２）グローバル人材育成のための指導方法の改善
（３）教員間の連携・協力，指導体制
（４）大学・企業との連携・ネットワーク
３．外部評価
（１）運営指導委員会

Ⅳ．今後の課題及び改善の方向性　・・・・・・・・・・・・２７
１．課題研究の取り組み
（１）探求基礎
（２）海外研修
（３）課題研究ワークショップ
２．英語力向上の取り組み
３．グローバルマインド向上の取り組み

Ⅴ．課題研究外報告　・・・・・・・・・・・・２８
１．高校生模擬国連
２．飛びたてジャパン参加

Ⅵ．フィールドワーク研修報告　・・・・・・・・・・・・３２

（巻末資料）
□平成２７年度第１学年３ヵ年教育課程　・・・・・・・・・・・・５７
□ＳＧＨ研究開発組織図　・・・・・・・・・・・・５８

Ⅰ．研究開発の概要

１．実施期間

平成２７年４月１日～平成２８年３月３１日

２．学校の概要

（１）学校名　学校法人　札幌日本大学学園　札幌日本大学高等学校

（２）課程・学科・生徒数

課程	学科	第１学年		第２学年		第３学年		計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全日制	普通科	３４１	１０	３５６	１０	３５３	１１	１０５０	３１
コース	総合進学	１５８	4	１６３	4	２００	5	５２１	１３
	特進	１１４	3	１０９	3	９２	3	３１５	9
	中高一貫	６９	3	８４	3	６１	3	２１４	9

（３）教職員数

校長	副校長	教頭	副教頭	教諭	専任講師	養護教諭	非常勤講師	司書	事務職員	計
1	1	3	1	５２	２５	2	２０	1	１０	１１４

３．研究開発名

北海道の産業課題を世界視点で捉え，解決に導くグローバル人材育成

４．研究対象生徒

（１）中高一貫コース高校１年生　６９名

（２）研究対象生徒プロフィール

①開始時英語検定資格取得状況（平成３０年２月現在）

ＳＥＦＲ	英語検定	平成２７年６月現在	平成３０年２月現在
Ｂ２	準１級		
Ｂ１	２級	4	9
Ａ２	準２級	２５	１２
Ａ１	３級	１９	１０
	４級	2	
	５級		
	取得なし	１９	2
	計	６９	３３

③開始時海外旅行・留学経験者　３５名。平成２８年３月現在全員が海外研修経験。

５．研究開始にあたって

（１）保護者に対し主旨説明

平成２７年４月６日に保護者に対して，スーパーグローバルハイスクールの指定を受けた経緯と今後の授業方針を説明し理解を求めた。

（２）生徒に対して主旨説明

スーパーグローバルハイスクール指定を受けた経緯と何故このような研究が必要なのか，また，グローバル化時代に於ける主体性，課題発見力，解決への積極性などの生きる力の必要性を説明した。

６．研究開発の目的・目標

（１）目的

今日の世界においては，社会，経済，文化のグローバル化が急速に進展し，国際的な流動性が高まっている。また，科学技術の急速な進歩と社会の高度化，複雑化や急速な変化に伴い，過去に蓄積された知識や技術のみでは対処できない新たな諸課題が生じている。これらに対応していくため，世界と競える新たな知識や専門的能力を持った人材が求められていることから，21 世紀の社会状況を展望し，激動する国際社会で活躍するグローバルリーダーとなるべく素養をもった人材の育成を研究開発の目的とする。

（２）目標

多文化社会において，「自我の確立・多様性の受容・普遍性への気づき」の IB 精神のもと，世界規模の視点にたって，グローバル化社会の課題を自らの問題意識から発見し，多角的に検証を行い，責任ある地球市民として多様性ある行動と発信を行える人材育成を目標とした，課題探究型（「課題の設定」・「調査（文献調査・フィールドワーク，実験，観察等の活動）」・「整理・分析」・「まとめ・表現・発信」という一連の探究活動の総称）のカリキュラム開発である。

目標とする成果物は，グローバルリーダーの育成に関る①カリキュラムの開発，②教材の開発，③授業実践や体制の構築，④パフォーマンス評価を含めた検証評価の仕組みづくりである。

生徒が取り組むテーマは，世界的な視野，感性をもって具現化するために，身近である北海道が直面する産業・環境・社会課題（食料と生産・観光産業・領土問題を題材）や戦後７０年を通じた歴史問題を題材にし，世界との関わり方に積極的に取り組むことで，自らが社会の問題を発見し，解決へ導く手法の研究を，課題探究型の研究を通じて成熟させる。

また，国際舞台での発信力，交渉力となる英語コミュニケーション力育成と，ジェネリックスキル（世の中の情報を的確かつ多角的に捉える視点と，それを発信する力）の研究も合わせて目標とする。

本校に於いても，教育ビジョンの一つに「世界で貢献する人」を掲げ，世界規模の視点にたってグローバル化社会の課題を自らの問題意識から発見し，多角的に検証を行い，責任ある地球市民として多様性ある行動と発信をすることができる人材の育成としている。

Ⅱ．研究開発の内容

１．課題研究の取り組み

（１）教育課程

①教育課程策定の方針

「探求基礎」における指導体制の方針として，高校の教科指導のあり方を新たな創造を目標としてシラバスの策定を行った。その基本方針は，教員が教えるのではなく，教員は課題を与えコーディネート，評価の立場とし，生徒自身は自ら調べ考え，教員に指導を請うということを基本として計画を進めた。先生は，公的機関・民間企業・大学と多様化し，本校教員と一緒になって生徒と意見交換を行いながら研究課題を進行する形態をとった。

②生徒の現状と方向性

ＩＴインフラの発達，整備と共に，比較的調べることはできる生徒達であるが，調べたことの正誤を判断し，課題を見出し議論する能力については，幼さが残る面が多く見られた。また，文書作成能力，計算ソフト，プレゼンテーションなどの使用についても，生徒間での技術的な能力差が大きい状況であった。

基礎的知識，探求型学習の基礎的技能を身につけることを目標に「探求基礎」を行い，グルー

プ議論，企画書策定，ポスターセッションの取り組みを実施したが，身近な生活の話題をテーマに世界とのつながりを意識する姿勢に課題が残った。

③探求基礎シラバス（２７年度）

科目名	学科名	学類名	年次	単位数	種別
探求基礎	普通科	中高一貫コース	1年	1	必履修
総合的学習				1	

	単元名	学習内容 学習のねらい	配当時間	観点別学習到達度目標				
				関心･意欲･態度	言語力 表現力	実践力	知識力	協働性 主体性
課題研究テーマ(「知る」基礎を学ぶ･新たな知識を得る)	世界規模の経済活動を，日本と北海道の対比を行いながら，北海道の現状の課題を探究	北海道の経済･観光について，産業分野別に統計調査から現状を知り課題をまとめる	4	北海道の経済を理解することで，各種産業を理解し，課題模索する	自分の意見を論理的に主張できる能力，コミュニケーション能力，ディベート能力，プレゼンテーション能力などが向上する	社会生活を通じ，柔軟性に富んだ問題解決能力を発揮し，与えられた課題，新たな活動などに対し，目標設定ができ，かつ，それを実現するためのプランニング能力の向上	自国の文化･歴史に深い知識と理解を持ち，他国に伝えることができること。また，他国の文化･歴史に対する理解を積極的に実行する姿勢	多角的な視点を持ち，多面的で広い視野を学ぼうとする姿勢を持ち，主張と協調性のバランスが取れ，冷静に対応でき，強いリーダーシップを発揮しようとする姿勢
		米国と日本･北海道の文化，経済，教育の相違点を調査し現状を理解する	4	米国と北海道の関係を多様な分野から知ることで，米国文化を理解する				
		オーストラリアと日本･北海道の文化，経済，教育の相違点を調査し現状を理解する	4	オーストラリアと北海道の関係を多様な分野から知ることで，オーストラリア文化を理解する				

	国際観光都市北海道の価値を高めるため，調査研究（対外国人）を実施し，北海道観光へのニーズ調査からその課題を取り上げた課題探究	国土交通省北海道運輸局が実施している訪日プロモーションについて，現状を理解し，課題を発見する	4	公的機関の取り組みと現状の課題に興味を示す				
		海外で働くキャリアデザインを知り，異文化意識を理解する	4	海外で働くキャリアデザインを知ることで，異文化に関する積極的理解を示す				
		発展途上国に於ける観光産業開発の実態を知り，観光産業に関する開発活動の意識を持たせる	4	観光産業を開発するにあたり，その手法や手段について関心を示す				
		国際教養大学フィールドワークを通じて，留学生に観光ニーズの調査を行う	20	予め計画したニーズ調査を積極的に行動に移す				
	北方領土問題に関する歴史的背景，政治活動，現在の国交交渉についての課題探究	北方領土の歴史を理解する	4	北方領土の歴史の課題に関心を示す				
		北方領土返還の歴史と現状（国交交渉）を理解する	4	北方領土問題に関する国交間の交渉状況に興味を示す				

	探求基礎総括	シンガポールの高校生を北海道に研修旅行目的で訪問していただくため，現地学校に対する企画書の策定	10	・自ら律しつつ他人とともに協調しようとする ・履修した内容を発展的に活用する姿勢				

④教育計画

授業日		内容	指導	授業形式
4月	９日（木）	オリエンテーション	副校長	講義
	１６日（木）	オリエンテーション	副校長	講義
	２３日（木）	北海道の観光分析	学年	グループワーク
	３０日（木）	北海道の観光分析	学年	グループワーク
5月	７日（木）	北海道の観光分析	学年	グループワーク
	２１日（木）	台湾からの訪問高校生と交流活動	学年	交流会
	２８日（木）	クリティカルシンキング研究	副校長	グループワーク
6月	４日（木）	北方領土問題（講義）	社会科	講義
	１１日（木）	北方領土問題（講義）	社会科	講義
	１８日（木）	北方領土問題（講義）	社会科	グループワーク
	２５日（木）	北海道の経済・観光	道庁職員	講義
7月	２日（木）	北海道の経済・観光	社会科	グループワーク
	９日（木）	フィールドワーク事前研究	学年	グループワーク
8月	２日（日） ３日（月） ４日（火） ５日（水）	１班 国内フィールドワーク	国際教養大学	グループワーク
	９日（日） １０日（月） １１日（火） １２日（水）	２班 国内フィールドワーク	国際教養大学	グループワーク
	２０日（木）	国内フィールドワーク振り返り	学年	グループワーク

	２７日（木）	国内フィールドワーク振り返り	学年	グループワーク
９月	３日（木）	国内フィールドワーク振り返り	学年	グループワーク
	８日（火）	前期生徒発表 第１回運営指導委員会	学年・社会科・国語科・英語科	成果発表
	１０日（木）	国内フィールドワーク振り返り	学年	
	１７日（木）	ＳＳＨ講演会に参加	―	講演会
１０月	１５日（木）	表現力・課題発見力テスト	国語科	テスト
	２２日（木）	北方領土問題（グループワーク）総括	社会科	グループワーク
	２９日（木）	発展途上国に於ける観光産業の起案	北海道大学	講義+ワークショップ
１１月	５日（木）	北海道運輸局が実施している訪日プロモーションについて	国土交通省運輸局	講義+ワークショップ
	１２日（木）	海外で働くキャリアデザイン，資源と観光他	北海道大学	講義+ワークショップ
	１９日（木）	シンガポールの高校生を北海道に研修旅行目的で訪問していただくため，現地学校に対する企画書の策定	社会科	グループワーク
	２６日（木）	北海道の観光課題	ＪＴＢ	講義+パネルディスカッション
１２月	１０日（木）	シンガポールの高校生に北海道に研修旅行目的で訪問してもらうため，現地学校に対する企画書の策定	社会科	グループワーク
	１７日（木）	在オーストラリア大使館領事による　オーストラリアと日本･北海道の文化，経済，教育の相違	在オーストラリア大使館	講義+ワークショップ
１月	１４日（木）	在アメリカ領事による米国と日本･北海道の文化，経済，教育の相違	在アメリカ大使館	講義+ワークショップ
	２１日（木）	シンガポールの高校生に北海道に研修旅行目的で訪問してもらうため，現地学校に対する企画書の策定・発表（プレゼン）	学年・英語科・社会科・国語科	グループワーク
	２８日（木）			
２月	４日（木）			グループワーク
	７日（祝）	北方領土フェスティバル　主張･フィールドワーク		フィールドワーク
	２５日（木）	シンガポールの高校生に北海道に研修旅行目的で訪問してもらうため，現地学校に対する企画書の策定・発表（プレゼン）		グループワーク
３月	１０日（木）			グループワーク
	１７日（木）	後期生徒発表 第２回運営指導委員会	学年・社会科・国語科・英語科	成果発表

	２１日（月）	海外フィールドワーク	シンガポール	講義+パネルディスカッション+プレゼンテーション
	２２日（火）			
	２３日（水）			
	２４日（木）			
	２５日（金）			

⑤パフォーマンス評価

- パフォーマンス評価を実施するにあたり，グローバルリーダー像を議論し，人材育成評価を策定した。
- 本年度の生徒評価については，提出したレポート・活動実績・発表評価を担当教員により評価を行った。次年度に向けては，その評価をどのような手法で実施するかを研究する計画である。

【パフォーマンス評価評価指標】

目標とするグローバルリーダーとして，身につけて置く力			グローバル人材育成到達度			
			D	C	B	A
			努力を要す	評価する	高いレベルで評価する	非常に高いレベルで評価する
言語力・表現力	①	自分の意見を論理的に主張できる能力	自分の主張をまとめることが不十分	自分の意見に適切に理由づけをすることができる	自分の意見を具体例などを適切に用いて，分かりやすく説明することができる	一貫性のある自分の意見を説得力のある表現を用いて伝え，共感させることができる
	②	論理的思考力	文章・統計資料などの事実を正しく理解し，それらを読み取り考えることが不十分な点が多い	文章・統計資料などの事実を正しく理解し，それらを読み取り考えることができる	文章・統計資料などの事実や難解な抽象概念を理解し，それに基づいて考えることができる	文章・統計資料などの事実や難解な抽象概念を理解し，自分の考えを構築することができる
	③	英語コミュニケーション能力	簡単な英語コミュニケーションを行うことが不十分	他の高校生と学校生活などに関する意見を交換できる程度の英語力	他の高校生と社会や国際問題などに関する意見を交換できる程度の英語力をもつ	他の高校生と社会や国際問題などに関する意見を高いレベルで活発に交換できる程度の英語力をもつ
	④	ディベート能力（英語・日本語）	立論を考えることが不十分	テーマに対して日本語で立論を立てることができる	他の高校生と英語でディベートを実践することができる	説得力のある適切な立論を英語で作成し，適切に論証することができる
	⑤	プレゼンテーション能力（英語・日本語）	PPT等の資料は作成できるが，自分の意見としての主張が不十分	PPT等を利用しながら，自分の意見を日本語で分かりやすく述べることができる	PPT等を利用しながら自分の意見を聴衆と関わりながら日本語で述べることができる	PPT等を利用しながら自分の意見を効果的に述べ，英語で聴衆に影響を与えることができる
実践力	⑥	社会生活を通じ，柔軟性に富んだ問題解決能力を発揮している	社会問題等への興味は示すが，問題解決を図ろうとする行動に欠ける	社会問題に興味をもち，解決のために意見を出すことができる	社会問題に興味をもち，よりよい解決策を考え出すことができる	社会における問題点を自ら見つけ，あらゆる解決策を比較検討することができる
	⑦	与えられた課題，新たな活動などに対し，目標設定ができ，かつ，それを実現するためのプランニング能力	与えられた課題，新たな活動など，客組的に取り組み，次の目標をたてることが不十分	与えられた課題，新たな活動など，客組的に取り組み，次の目標をたてることができる	与えられた課題，新たな活動など，客組的に取り組み，次の目標をたて，対策も策定できる	与えられた課題，新たな活動など，客組的に取り組み，次の目標をたて，対策を策定し実行する姿勢を示すことができる
	⑧	経験と知識を活かし，積極的に取り組む能力	自分の経験を振り返ることはできるが，それらを表現することが不十分	自分の経験を振り返り，考えたことを言語化することができる	自分の経験を客観的に捉え，そこから学び得たことを言語化することができる	自分の経験を客観的に捉え，そこから学び得たことを一般化することができる
	⑨	フィールドワークの主旨を理解し，計画的に実行することができる	フィールドワークに取り組む計画が策定できていない	フィールドワークの計画を立て，実践し，経験したことを活かすことができる	全体を見据えたフィールドワークの計画を立て，柔軟に実践することができる	全体を見据えたフィールドワークの計画を立て，柔軟に実践することができ，その結果をとりまとめることができる
知識力	⑩	デジタルツールを多面的に使いこなす能力	インターネットやWord，PPTなどを活用する姿勢に欠ける	インターネットやWord，PPTなどの基本的な使い方がわかる	インターネットやWord，PPTなどのそれぞれの特徴を活かし，使用することができる	インターネットやWord，PPTなどを目的に応じて効果的に使用することができる
	⑪	自国の文化・歴史に深い知識と理解を持ち，他国に伝えることができること	自国の文化・歴史について積極的に知識を得ようとしない	自国の文化・歴史について興味があり，積極的に知識を得ようとしている	自国の文化・歴史について積極的に知識を得て，理解を深めようとしている	自国の文化・歴史について十分な知識があり，自分なりの解釈をすることができる
	⑫	他国の文化・歴史に対する理解を積極的に実行する姿勢	他国の文化・歴史について興味を示さず，消極的な知識の習得に留まっている。	他国の文化・歴史について興味があり，積極的に知識を得ようとしている	他国の文化・歴史について積極的に知識を得て，理解を深めようとしている	他国の文化・歴史について十分な知識があり，自分なりの解釈をすることができる
協働性・主体性	⑬	多角的な視点を持ち，他面的で広い視野を学ぼうとする姿勢	他者の意見を聞きいれることなく，自分の考えを主張しすぎる	他者の意見を聞き，自分の考えを深めることができる	事象を複数の情報源から判断し，自分の考えに反映させることができる	事象を吟味された複数の情報源から理解し自分の考えに反映させることができる
	⑭	主張と協調性のバランスが取れ，冷静に対応できる姿勢	自分の意見と他者の意見の相違理解が不十分なことが多い	自分の意見と他者の意見の相違が分かり，良さに気がつくことができる	自分の意見と他者の意見の相違が分かり，相手が説得する交渉ができる	自分の意見と他者の意見を客観的に捉え，相手を納得させることや状況に応じ折衷案を提案することができる
	⑮	強いリーダーシップを発揮することができる能力	何事においても積極的に取り組もうとする姿勢に欠ける	組織の中で率先して課題や政策に取り組もうとしている	組織の中で率先して課題や政策に取り組み，他人が敬遠することも積極的に取り組んでいる	組織の中で率先して課題や政策に取り組み，他人が敬遠することも積極的に取り組んでいる。また，組織をまとめようとする実行力を要している
	⑯	他者の痛みを理解し，サポートできる心	立場の弱い者に対する心構えを持ち合わせていない	立場の弱い者の気持ちを積極的に理解しようとしている	立場の弱い者を理解し，何が必要か考えることができる	立場の弱い者を理解し，何が必要か考え，実践に移すことができる
関心・意欲・態度	⑰	日本，世界で発生する出来事（政治・エネルギー・紛争・移民・難民・経済・科学などの多岐に渡る内容）に興味を持ち，その内容について積極的に理解しようとする姿勢をもち惜しみない努力，行動をしようとする姿勢	ほとんど興味を示さない	興味を示すが，理解したり積極的に情報を収集したりする姿勢に欠ける	興味を示し，その内容を自主的に調査し，その問題点をまとめ発信しようと努力する姿勢が見られる	興味を示し，その内容を自主的に調査し，その問題点をまとめ発信しようと努力する姿勢，また，それらの問題点を外部組織と一緒になって解決する姿勢が見られる

（2）教育課程内の取り組み

①探求基礎　課題研究テーマ

「知る」基礎を学ぶ・新たな知識を得る・探究を実践する

「知りたい」に始まり「知りたい」を見つける。そして，容易に答えの見えない問題に気づいて立ち向かおうとする力の育成

ア）課題研究テーマＡ（「知る」基礎を学ぶ・新たな知識を得る）

世界規模の経済活動を，日本と北海道の対比を行いながら，北海道の現状の課題を探究

講師	役職	テーマ
嘉屋潤一主任	北海道経済部観光局国際観光グループ	○北海道の経済について ① 北海道の経済状況を，各種産業と人口の関係から分析し，現状の経済課題を講演いただいた。 ② 人口減少・少子高齢化が進む中，観光は北海道地域消費の拡大，雇用の維持・創出など幅広い経済効果や地域活性化に大きな役割を果たしていることを確認。 ③ 北海道庁の観光を含めた経済支援の取り組みを学ぶ。 ④ 北海道の経済課題について，グループスタディワークショップ（検討 10 分＋発表 10 分）
（検証） ・ 北海道の各産業に於ける生産高，日本に於けるシェアなどの統計数値を用いて研究がなされた。生徒はその情報の多くを情報として知りえておらず，初めて北海道の産業課題を理解できたと考えられる。また，産業課題は人口課題にも繋がっていることを学んだ。 ・ グループワークでは，知りえた情報を基にして，産業別の課題を分析した。多くのグループでは，産業誘致を中心として課題を掲げていた。		
加茂聖和係長 伊藤美和係長	北海道運輸局観光部国際観光課	○公的機関における北海道の観光開発の現状と課題（北海道運輸局が主幹する訪日プロモーションの紹介と課題） ① ビジット・ジャパン（ＶＪ）地方連携事業北海道ブロック戦略 【戦略Ⅰ】北海道の３大ブランドを核とした誘客促進プランの説明 【戦略Ⅱ】北海道観光の課題を解消しレベルアップを図る効果的なプロモーションの説明 【戦略Ⅲ】市場ごとの成熟度に基づいたプロモーション事業構築の参考事例及び事業高度化のポイントの説明 ③ 現在北海道道庁が主幹する取り組みについて，具体的な数値を用いて説明を受けた。 ④ 北海道の観光課題についてグループスタディワークショップ（検討 10 分＋発表 10 分）

（検証）

・ 国土交通省北海道運輸局は国の機関でありながら，運輸関係の視点から北海道の観光産業などを支えていることを理解した。
・ 特に外国からの観光客の招致活動を積極的に取り組んでおり，また，道庁との連携も密接であることを理解した。
・ 観光産業は，企業主体であると偏った認識をしていた生徒は，国，道の公的機関の力が大きいことに気づいた。
・ 国ごとに北海道への観光月が異なる背景（観光ニーズ）には，雪，宗教，航空手段などの文化的要素とアクセス要素が絡み合っていることを理解した。
・ 提出頂いた統計資料をグループ学習時に分析を行った。統計資料の中には，情報教育，数学統計などの要素が含まれており，教科指導の役割が社会活動でのスキルに繋がっていることを生徒は感じていた。

イアン・ブレイジア領事	在オーストラリア領事館	○オーストラリアの文化，観光と日本との比較論 ① 北海道に観光客として多く来道されるオーストラリアの文化，北海道との産業，経済のつながりについて領事による説明を英語で受けた。 ② 特に冬期観光地としてニセコがその主流となっていることや，世界的にも平地での雪質の良さによる海外客高い評価を学ぶ。 ③ 国土の広さの異なりによる文化気質の違い，オーストラリアの大学事情についても講演をいただいた。

（検証）

・ 英語で説明をお願いしたところ，半数の生徒は情報を正しく理解していたようだ。
・ オーストラリアの交通関係と日本の交通関係の違い，北海道の自然とオーストラリアの自然の相違について情報を得た。
・ オーストラリアからは冬に多くの観光客がニセコのスキーを楽しみに来道していることを理解。滞在型の観光モデルであることを知ったようだ。
・ オーストラリアの水資源の問題を，家庭でのシャワー時間などの具体的な事例を交えて説明いただき，生活文化の違いを理解した。

ハービー・ビーズリー領事 牛丸由恵担当官	在米国領事館 広報文化交流担当	○米国の文化，観光と日本との比較論 日本との同盟関係にあたる米国の文化，日本との産業，経済の連携について学んだ。講演は英語で実施。 ① また，ビジネス客以外（観光客招致）における，米国人のニーズについても話された。 ② 領事の仕事について，講演をいただいた。

（検証）

・ 同盟関係にある日本と米国について講演。
・ 色々な国で仕事をする楽しさや領事としての役割などを説明され，生徒は海外で働くことへの意識が向上したと考えられる。
・ 国土の大きさから州ごとに文化の違いがあることを説明されたことに，日本との違いをより体感したようだ。

・　米国留学の仕組みを説明いただき，生徒が留学を身近に感じるようになったようだ。

イ）課題研究テーマＢ（「知る」基礎を学ぶ・新たな知識を得る）

国際観光都市北海道の価値を高めるため，調査研究（対外国人）を実施し，北海道観光へのニーズ調査からその課題を取り上げた課題探究

講師	役職	テーマ
花岡卓郎先生	北海道大学観光学高等研究センター博士	○発展途上国での観光開発，観光ビジネスの構築論について，経験を踏まえ指導を行った。 ① 観光へのニーズ調査とプラン策定について，花岡先生が策定された諸外国の実例を学んだ。 ② グループスタディワークショップ（検討 10 分＋発表 10 分）テーマは以下の通り 本校に隣接し，生徒も多く住む札幌市は，世界的に見ても珍しい，多雪の大都市である。「なまら降ってなまら積もる雪を資源化しよう」 ①「雪」のデメリットを考える。 ②デメリットのプラス転換を考える。 ③プラス転換するとどんな効果が出るのかを比較研究 ④アイデアを発表 講義を踏まえて，生徒 5～6 人の 12 グループで検討･発表を行った。
（検証） ・ ジンバブエ政府と協力して実施された観光開発についての講演から，観光事業を立ち上げ拡大することの難しさ，国民性の違いを理解した。 ・ 北海道大学の取り組みとして，発展途上国政府と契約した観光事業支援プロジェクトを積極的に取り組んでいることを生徒は学んだ。 ・ 講演後，「雪」をテーマとしたグループ活動を行い発表した。ここでは，北海道の自然環境をどのようにしてビジネス化できるのかを各グループで検討した。		
村上佳代先生	北海道大学観光学高等研究センター特任助教授	○中東に於ける生活文化の相違と観光事業の思案について ① テーマは「ヨルダンという国での地域のお宝探し」。高校時代，文化財を守る仕事に興味を持ったところから，芸術学部，歴史遺産学科，大学院への進学を通して学んだことを紹介された。 ② ヨルダンがどんな国か簡単に紹介し，死海やペトラ遺跡，勤務されている博物館のあるサルト市の社会背景について写真や映像を交えて講義された。 ③ 博物館での具体的な仕事として，サルトの面白そうなものを探して調査する，観光マップを作成する，ガイドを養成する，地域住民を巻き込む，の 4 点について写真やエピソードを使って講義された。 ④ イスラム教国であるヨルダンでの食習慣，部族の大切さ，女性の地位などの文化意識の指導。

<table>
<tr><td colspan="3">（検証）
・ 村上先生がヨルダン政府から受託されたヨルダン博物館の観光化の事業化経験を講演いただき，その内容についてディスカッションを行った。グループ内で，進行リーダーを定め，発表までのプロセスを取りまとめた。
・ 中東の女性の宗教的な生き方，仕来たりなどを学び，文化の違いを痛感した。</td></tr>
<tr><td>福山貴史先生</td><td>北海道大学観光学高等研究センター学術研究員</td><td>○発想の転換から課題発見，課題解決の方法を考える
① 福山先生のテーマは「負の存在」の資源化プロセス～見方を変えて地域を元気に～。クイズも交え，資源化された日本の観光資源を画像で紹介された。カプセルホテル，夜の工場，車の解体ショー，地吹雪，チェルノブイリ，多治見など。
② エゾシカと流氷という，北海道において負の存在だったが観光資源化されたものについて，具体的な数字や写真を用いて講義された。
③ ブランディング（客にとっての商品のサービス価値を高める）とマーケティング（商品・サービス価値を客に宣伝する）という 2 つの視点を踏まえて，この後のワークショップに向けて生徒に考え方を講義された。</td></tr>
<tr><td colspan="3">（検証）
・ 商品開発などにおける発想の転換を図ることを学ばせた。ブランディングとマーケティングの重要性に興味をもった。
・ 今後の研究論文作成における，重要な分析手段であることを生徒は実感した。</td></tr>
</table>

大川正勝社員 福原恵子社員	株式会社 ＪＴＢ	○海外に於ける文化の違いを認識した交流の仕方について ① パワーポイントを利用し，異文化世界で協働することはできるのか，異文化社会での交渉術は，宗教を理解するとは，などの講演がされた。コミュニケーションとは何か，初対面の人との印象の作り方，ホストの人々との関係の作り方など，オーストラリア研修旅行を視野に入れて，生徒のアクティビティも行いながら具体的，実践的な内容で講演された。 とかく，言語によるコミュニケーションに捉われがちであるが，国民性の違いにより，コミュニケーションも異なることを事例を示しながら生徒に伝える手法であった。 ② 今日の世界でなくてはならない考え方「グローバル化」と「ＩＴ化」について，パワーポイントを用いて講演された。グローバル化と国際化の違い，労働の消滅，アップル社のビジネス，所得ピラミッド，日本人の賃金の高さなど，具体的かつ現実的な内容で行われた。 グローバル化と国際化の違いを，国境があるのかないのかに例え説明をされた。グローバル化の時代は，国境がない。その考え方が必要であることを強調されていたことが印象深い。 ○パネルディスカッション （1）テーマ 「将来の北海道の観光」 （2）パネラー 大川先生，福原先生，花岡先生，辻教諭と生徒たちの間で行われた。進行は沖田副校長。 （3）内容 ①導入として，大川先生のグローバル時代における世界の価値観の話題提供からスタート。 ②花岡先生からは，飛行機と船による旅行の異なりを提言され，新たな観光モデルのイメージを提言 ③福原先生からは，東南アジアの国の方が北海道の除雪（函館での外国人観光客の除雪）を楽しむためのツアーの紹介。北海道ではマイナスイメージであるが発想の転換によって，観光の一つとなることを紹介 ④生徒からは北海道の自然を利用すること，移住を勧める観光，雪の輸出などが提案された。 ⑤ＪＴＢ武藤氏からは羅臼でのバードウォッチングの紹介 ⑥副校長からは資生堂のリップクリーム高校生モニター，アマゾンピラニアツアーなどの視点が紹介された。 パネルディスカッションを通じて，発想の転換により新たな企画が生まれることを具体的に提言。 積極的に話題に溶け込み参加する姿勢を植えつけたく実施し

		たが，まだまだ積極的な参加は得られていない結果は残念である。これからの企画書の策定に活かしていくべき内容であった。
（検証） ・ 文化の違いについて，挨拶の仕方，会話の仕方，説明の仕方など実例を示しながら生徒に指導を行った。生徒は，宗教，国の文化により，異なりがあることを学んだ。今後の研究論文策定の際，活用できる内容であった。 ・ 第2部のパネルディスカッションでは，「将来の北海道の観光」をテーマに掲げ，フリートークで進行した。生徒はスタート時，中々意見を発言しなかったが，進むに連れて意見を述べるようになり，活性化した議論となった。 ・ このようなシンポジウム形態を取り入れることで，より積極性の高い活動に発展できることを確認した。		
副校長 辻維之教員 諸橋賢教員 宮間江一郎教員	札幌日本大学高校教員	○シンガポールの高校生を北海道に誘致するための観光企画書とプレゼンテーション資料の策定 ① １０グループ構成にして，「企画書」「プレゼンテーション資料」の策定。 ② 企画書では「招致タイトル」「招致計画」「行程」「経費」「招致のねらい」などを策定する。発表は，旅行会社の社員を招いて評価を行った。 ③ プレゼンテーションでは，３月実施のシンガポールフィールドワークの際，現地高校に紹介した。
（検証） ・ １年次のとりまとめとして，「海外の高校生を北海道に招致するための観光企画書」を５０分×		

１０時数で策定する。成果物は①企画書１０枚②プレゼン資料１０画面③ポスター発表１面を指示し，各グループで開始した。 ・ 発表を１グループ１０分で実施した。グループごとに工夫をした内容であった。 ・ ポスター発表は「運営指導委員会」の中でも発表した。

ウ）課題研究テーマＣ（「知る」基礎を学ぶ・新たな知識を得る）

北方領土問題に関する歴史的背景，政治活動，現在の国交交渉についての課題探究

講師	役職	テーマ
辻維之教員	札幌日本大学高校社会科教諭	○情報の収集 北方領土　地理に関する背景理解
諸橋賢教員	札幌日本大学高校社会科教諭	○情報の収集 北方領土　歴史に関する背景理解
宮間江一郎教員	札幌日本大学高校社会科教諭	○現代社会の国際問題の検討 他国間に於ける領土問題の背景と現状理解
辻維之教員 諸橋賢教員	札幌日本大学高校社会科教諭	○個人探求 個人で歴史背景，現状の交渉課題をまとめ，自分が交渉官の立場となった場合を想定して，対ロシアとの交渉ストーリーを考える課題を提示し探求させた。
辻維之教員 諸橋賢教員	札幌日本大学高校社会科教諭	○グループワーク 個人探求を受けて北方領土問題の背景・その課題と日本政府の交渉の歴史を整理しながら，高校生として発信できる主張を各グループで議論をさせた。日本政府の交渉経緯は否定せず，現状を理解した上での主張を検討させた。
辻維之教員 諸橋賢教員 宮間江一郎教員	札幌日本大学高校社会科教諭	○プレゼンテーション グループ毎のプレゼンテーションを１グループ１０分で実施。
辻維之教員 諸橋賢教員 宮間江一郎教員	札幌日本大学高校社会科教諭	○北方領土の日（平成２８年２月７日）フェスティバル参加 ・ ２月７日は北方領土返還の日と政府機関で定められており，全国の会場で返還運動が行われている。札幌会場は，雪まつり会場にて実施され，本校生徒４名が研究課題を発表した。 ・ 署名活動にも参加し，多くの方々と接する事ができた。生徒の感想は，道内の方よりも道外の方の方が興味関心をしていただいたことに，道民として空しい気持ちを持ったようであった。 ・ 教科書レベルで学んだ内容と実際の交渉内容や国交

		問題について，多くの矛盾を感じたようであった。
堀達也会長	公益社団法人　北方領土復帰期成同盟	○プレゼンテーション用原稿の監修 平成２８年２月７日（北方領土の日）政府主催の式に於いて，本校生徒の研究を２０分発表。その発表内容の事前監修をお願いするとともに，資料提供を受ける。また，発表にあたって，生徒への指導を実施。

（検証）

- 北方領土問題は，国交レベルでのまた政治レベルでの内容となるため，生徒には政府発行の資料に基づいて，歴史・政治の問題を学ばせることとした。歴史認識では，認識の違いがあることの難しさを学ばせた。
- 公益社団法人北方領土復帰期成同盟に生徒の研究内容を監修していただき，一段と認識の違いを感じることができた。
- 研究発表の場を政府主催２月７日北方領土の日で，４名の生徒が代表して研究論文を発表した。

②外部講師による課題研究に関する生徒の理解度検収

（検収１）　課題内容について，興味・関心が向上しましたか

指導者		課題内容	大変向上した		向上した		あまり向上しなかった		向上しなかった	
北海道庁職員	嘉屋職員	（１）世界の外国人旅行者受入数上位の国々の状況	17	24.6%	30	43.5%	16	23.2%	6	8.7%
		（２）日本への海外旅行者上位の国々の状況	15	21.7%	33	47.8%	14	20.3%	7	10.1%
		（３）北海道への海外旅行者上位の国々の状況	20	29.0%	30	43.5%	15	21.7%	4	5.8%
		（４）より旅行者数を増やすためにはの手法研究	26	37.7%	28	40.6%	10	14.5%	5	7.2%
		（５）訪日観光の魅力は日本人そのものであるテーマ	18	26.1%	32	46.4%	16	23.2%	3	4.3%
		（６）プロモーションがなぜ必要かについて	12	17.4%	32	46.4%	19	27.5%	6	8.7%
		（７）国土交通省と観光庁の業務内容について	11	15.9%	26	37.7%	21	30.4%	11	15.9%
		（８）JNTO(日本政府観光局)の重点20市場と市場ごとのプロモーションについて	10	14.5%	27	39.1%	24	34.8%	8	11.6%
国土交通省職員	加茂職員	（１）北海道運輸局が実施している訪日プロモーションについて	17	24.6%	27	39.1%	22	31.9%	3	4.3%
北海道大学先生	花岡先生	（１）観光開発と社会問題について	16	23.2%	34	49.3%	18	26.1%	1	1.4%
		（２）観光分野の国際協力について	21	30.4%	29	42.0%	16	23.2%	3	4.3%
		（３）海外での観光開発の仕事について	22	31.9%	29	42.0%	12	17.4%	6	8.7%
	村上先生	（１）海外で働くキャリアデザイン（女性スタッフ編）について	23	33.3%	30	43.5%	9	13.0%	7	10.1%
		（２）地域の「お宝」を探し出す仕事の手法について	19	27.5%	30	43.5%	14	20.3%	6	8.7%
	福山先生	（１）地域社会を脅かす「負の存在」について	18	26.1%	38	55.1%	10	14.5%	3	4.3%
		（２）資源化の事例研究について	12	17.4%	36	52.2%	18	26.1%	3	4.3%
		（３）資源化プロセスの解明について	17	24.6%	33	47.8%	16	23.2%	3	4.3%
オーストラリア領事館領事	領事　イアン・ブレイジア	（１）オーストラリアの交通（シドニー）から見た北海道の交通について	19	27.9%	28	41.2%	18	26.5%	3	4.4%
		（２）オーストラリアの州行政と北海道の行政について	20	29.4%	27	39.7%	15	22.1%	6	8.8%
		（３）オーストラリアの観光事業と北海道の観光事業について	22	32.4%	32	47.1%	12	17.6%	2	2.9%
		（４）オーストラリアの経済活動と日本の関係	20	29.4%	29	42.6%	18	26.5%	1	1.5%
		（５）オーストラリアの教育制度と日本の教育制度について	19	27.9%	30	44.1%	16	23.5%	3	4.4%
米国領事館領事	ハービー・ビーズリー広報文化交流担当領事	（１）海外の国を知る（海外留学・アメリカ留学・領事館の役割など）	32	47.1%	24	35.3%	10	14.7%	2	2.9%
		（２）他国を知ることで、北海道の観光課題を策定するニーズ分析について	24	35.3%	26	38.2%	14	20.6%	4	5.9%
		（３）海外留学に対する知識について	29	42.6%	26	38.2%	10	14.7%	3	4.4%
ＪＴＢ社員	福原社員	（１）異文化世界で協働することはできるのかについて	24	34.8%	26	37.7%	15	21.7%	4	5.8%
国際教養大学		（１）英語指導について	40	58.0%	23	33.3%	3	4.3%	3	4.3%
		（２）クリティカルシンキングの手法について	43	62.3%	21	30.4%	2	2.9%	3	4.3%
		（３）３日間の活動について	46	66.7%	19	27.5%	3	4.3%	1	1.4%

設定した課題テーマについて，生徒の興味・関心は高い結果であった。

（検収２）　課題内容の説明は理解できましたか

指導者		課題内容	大変理解できた		理解できた		ほぼ理解できた		理解できなかった	
北海道庁職員	嘉屋職員	（１）世界の外国人旅行者受入数上位の国々の状況について	25	36.2%	32	46.4%	12	17.4%	0	0.0%
		（２）日本への海外旅行者上位の国々の状況について	29	42.0%	30	43.5%	10	14.5%	0	0.0%
		（３）北海道への海外旅行者上位の国々の状況について	25	36.2%	34	49.3%	10	14.5%	0	0.0%
		（４）より旅行者数を増やすためにはの手法研究について	27	39.1%	29	42.0%	13	18.8%	0	0.0%
		（５）訪日観光の魅力は日本人そのものであるテーマについて	22	31.9%	31	44.9%	15	21.7%	1	1.4%
		（６）プロモーションがなぜ必要かについて	19	27.5%	33	47.8%	15	21.7%	2	2.9%
		（７）国土交通省と観光庁の業務内容について	13	18.8%	38	55.1%	17	24.6%	1	1.4%
		（８）JNTO(日本政府観光局)の重点20市場と市場ごとのプロモーションについて	12	17.4%	31	44.9%	23	33.3%	3	4.3%
国土交通省職員	加茂職員	（１）北海道運輸局が実施している訪日プロモーションについて	20	29.0%	30	43.5%	17	24.6%	2	2.9%
北海道大学先生	花岡先生	（１）観光開発と社会問題について	26	37.7%	30	43.5%	11	15.9%	2	2.9%
		（２）観光分野の国際協力について	23	33.3%	34	49.3%	10	14.5%	2	2.9%
		（３）海外での観光開発の仕事について	24	34.8%	32	46.4%	11	15.9%	2	2.9%
	村上先生	（１）海外で働くキャリアデザイン（女性スタッフ編）について	22	31.9%	31	44.9%	13	18.8%	3	4.3%
		（２）地域の「お宝」を探し出す仕事の手法について	24	34.8%	28	40.6%	15	21.7%	2	2.9%
	福山先生	（１）地域社会を脅かす「負の存在」について	27	39.1%	28	40.6%	13	18.8%	1	1.4%
		（２）資源化の事例研究について	19	27.5%	33	47.8%	14	20.3%	3	4.3%
		（３）資源化プロセスの解明について	20	29.0%	33	47.8%	13	18.8%	3	4.3%
オーストラリア領事館領事	領事　イアン・ブレイジア	（１）オーストラリアの交通（シドニー）から見た北海道の交通について	21	30.9%	28	41.2%	19	27.9%	0	0.0%
		（２）オーストラリアの州行政と北海道の行政について	17	25.0%	27	39.7%	20	29.4%	4	5.9%
		（３）オーストラリアの観光事業と北海道の観光事業について	18	26.5%	31	45.6%	18	26.5%	1	1.5%
		（４）オーストラリアの経済活動と日本の関係について	17	25.0%	29	42.6%	20	29.4%	2	2.9%
		（５）オーストラリアの教育制度と日本の教育制度について	21	30.9%	30	44.1%	17	25.0%	0	0.0%
米国領事館領事	ハービー・ビーズリー広報文化交流担当領事	（１）海外の国を知る（海外留学・アメリカ留学・領事館の役割など）	26	38.2%	26	38.2%	14	20.6%	2	2.9%
		（２）他国を知ることで、北海道の観光課題を策定するニーズ分析について	25	36.8%	24	35.3%	16	23.5%	3	4.4%
		（３）海外留学に対する知識について	27	39.7%	26	38.2%	13	19.1%	2	2.9%
ＪＴＢ社員	福原社員	（１）異文化世界で協働することはできるのかについて	25	36.2%	23	33.3%	20	29.0%	1	1.4%
国際教養大学		（１）英語指導について	39	56.5%	20	29.0%	10	14.5%	0	0.0%
		（２）クリティカルシンキングの手法について	38	55.1%	25	36.2%	6	8.7%	0	0.0%
		（３）３日間の活動についてのねらいについて	42	60.9%	20	29.0%	7	10.1%	0	0.0%

課題内容の理解度は，比較的高い結果であった。基礎教養として取り組ませることは，ほぼ達成できた結果と考えられる。

（検収３）　課題内容の説明を聞いて，その課題を理解できた。または，自分で課題を発見することができた

指導者		課題内容	大変理解できた		理解できた		ほぼ理解できた		理解できなかった	
北海道庁職員	嘉屋職員	（１）世界の外国人旅行者受入数上位の国々の状況について	11	15.9%	25	36.2%	23	33.3%	10	14.5%
		（２）日本への海外旅行者上位の国々の状況について	13	18.8%	26	37.7%	19	27.5%	11	15.9%
		（３）北海道への海外旅行者上位の国々の状況について	10	14.5%	29	42.0%	19	27.5%	11	15.9%
		（４）より旅行者数を増やすためにはの手法研究について	18	26.1%	29	42.0%	14	20.3%	8	11.6%
		（５）訪日観光の魅力は日本人そのものであるテーマについて	12	17.4%	29	42.0%	17	24.6%	11	15.9%
		（６）プロモーションがなぜ必要かについて	8	11.6%	25	36.2%	25	36.2%	11	15.9%
		（７）国土交通省と観光庁の業務内容について	5	7.2%	24	34.8%	26	37.7%	14	20.3%
		（８）JNTO(日本政府観光局)の重点20市場と市場ごとのプロモーションについて	9	13.0%	24	34.8%	26	37.7%	10	14.5%
国土交通省職員	加茂職員	（１）北海道運輸局が実施している訪日プロモーションについて	9	13.0%	27	39.1%	25	36.2%	8	11.6%
北海道大学先生	花岡先生	（１）観光開発と社会問題について	16	23.2%	26	37.7%	20	29.0%	7	10.1%
		（２）観光分野の国際協力について	14	20.3%	28	40.6%	20	29.0%	7	10.1%
		（３）海外での観光開発の仕事について	13	18.8%	29	42.0%	19	27.5%	8	11.6%
	村上先生	（１）海外で働くキャリアデザイン（女性スタッフ編）について	10	14.5%	33	47.8%	15	21.7%	11	15.9%
		（２）地域の「お宝」を探し出す仕事の手法について	9	13.0%	35	50.7%	17	24.6%	8	11.6%
	福山先生	（１）地域社会を脅かす「負の存在」について	11	15.9%	33	47.8%	20	29.0%	5	7.2%
		（２）資源化の事例研究について	11	15.9%	32	46.4%	18	26.1%	8	11.6%
		（３）資源化プロセスの解明について	7	10.1%	32	46.4%	21	30.4%	9	13.0%
オーストラリア領事館領事	領事　イアン・ブレイジア	（１）オーストラリアの交通（シドニー）から見た北海道の交通について	9	13.2%	36	52.9%	15	22.1%	8	11.8%
		（２）オーストラリアの州行政と北海道の行政について	9	13.2%	34	50.0%	12	17.6%	13	19.1%
		（３）オーストラリアの観光事業と北海道の観光事業について	14	20.6%	27	39.7%	17	25.0%	10	14.7%
		（４）オーストラリアの経済活動と日本の関係について	12	17.6%	27	39.7%	17	25.0%	12	17.6%
		（５）オーストラリアの教育制度と日本の教育制度について	13	19.1%	28	41.2%	16	23.5%	11	16.2%
米国領事館領事	ハービー・ビーズリー広報文化交流担当領事	（１）海外の国を知る（海外留学・アメリカ留学・領事館の役割など）	16	23.5%	24	35.3%	18	26.5%	10	14.7%
		（２）他国を知ることで、北海道の観光課題を策定するニーズ分析について	13	19.1%	25	36.8%	20	29.4%	10	14.7%
		（３）海外留学に対する知識について	15	22.1%	25	36.8%	19	27.9%	9	13.2%
ＪＴＢ社員	福原社員	（１）異文化世界で協働することはできるのかについて	18	26.1%	22	31.9%	19	27.5%	10	14.5%
国際教養大学		（１）英語指導について	36	52.2%	22	31.9%	8	11.6%	3	4.3%
		（２）クリティカルシンキングの手法について	32	46.4%	25	36.2%	11	15.9%	1	1.4%
		（３）３日間の活動についてのねらいについて	40	58.0%	18	26.1%	8	11.6%	3	4.3%

各テーマの課題を読み込むことに対し，苦労をする生徒が多い結果となった。その背景には，基礎教養を充分に身につけていないことが考えられる。

（検収４）　自身のキャリア目標に向けて

指導者		課題内容	大変参考になっ		参考になった		あまり参考にならなかった		参考にならなかった	
北海道庁職員	嘉屋職員	(1)世界の外国人旅行者受入数上位の国々の状況について	6	8.7%	21	30.4%	27	39.1%	15	21.7%
		(2)日本への海外旅行者上位の国々の状況について	6	8.7%	22	31.9%	27	39.1%	14	20.3%
		(3)北海道への海外旅行者上位の国々の状況について	5	7.2%	25	36.2%	25	36.2%	14	20.3%
		(4)より旅行者数を増やすためにはの手法研究について	11	15.9%	24	34.8%	25	36.2%	9	13.0%
		(5)訪日観光の魅力は日本人そのものであるテーマについて	11	15.9%	23	33.3%	21	30.4%	14	20.3%
		(6)プロモーションがなぜ必要かについて	9	13.0%	28	40.6%	19	27.5%	13	18.8%
		(7)国土交通省と観光庁の業務内容について	4	5.8%	23	33.3%	27	39.1%	15	21.7%
		(8)JNTO(日本政府観光局)の重点20市場と市場ごとのプロモーションについて	7	10.1%	23	33.3%	27	39.1%	12	17.4%
国土交通省職員	加茂職員	(1)北海道運輸局が実施している訪日プロモーションについて	6	8.7%	28	40.6%	23	33.3%	12	17.4%
北海道大学先生	花岡先生	(1)観光開発と社会問題について	11	15.9%	29	42.0%	18	26.1%	11	15.9%
		(2)観光分野の国際協力について	8	11.6%	29	42.0%	21	30.4%	11	15.9%
		(3)海外での観光開発の仕事について	14	20.3%	25	36.2%	20	29.0%	10	14.5%
	村上先生	(1)海外で働くキャリアデザイン（女性スタッフ編）について	17	24.6%	28	40.6%	9	13.0%	15	21.7%
		(2)地域の「お宝」を探し出す仕事の手法について	11	15.9%	31	44.9%	16	23.2%	11	15.9%
	福山先生	(1)地域社会を脅かす「負の存在」について	15	21.7%	32	46.4%	13	18.8%	9	13.0%
		(2)資源化の事例研究について	8	11.6%	31	44.9%	18	26.1%	12	17.4%
		(3)資源化プロセスの解明について	10	14.5%	31	44.9%	17	24.6%	11	15.9%
オーストラリア領事館領事	領事　イアン・ブレイジア	(1)オーストラリアの交通（シドニー）から見た北海道の交通について	10	14.7%	30	44.1%	17	25.0%	11	16.2%
		(2)オーストラリアの州行政と北海道の行政について	8	11.8%	25	36.8%	25	36.8%	10	14.7%
		(3)オーストラリアの観光事業と北海道の観光事業について	8	11.8%	31	45.6%	20	29.4%	9	13.2%
		(4)オーストラリアの経済活動と日本の関係について	9	13.2%	30	44.1%	18	26.5%	11	16.2%
		(5)オーストラリアの教育制度と日本の教育制度について	11	16.2%	28	41.2%	17	25.0%	12	17.6%
米国領事館領事	ハービー・ビーズリー広報文化交流担当領事	(1)海外の国を知る（海外留学・アメリカ留学・領事館の役割など）	21	30.9%	23	33.8%	14	20.6%	10	14.7%
		(2)他国を知ることで、北海道の観光課題を策定するニーズ分析について	17	25.0%	18	26.5%	23	33.8%	10	14.7%
		(3)海外留学に対する知識について	20	29.4%	24	35.3%	14	20.6%	10	14.7%
JTB社員	福原社員	(1)異文化世界で協働することはできるのかについて	17	24.6%	27	39.1%	17	24.6%	8	11.6%
国際教養大学		(1)英語指導について	33	47.8%	24	34.8%	7	10.1%	5	7.2%
		(2)クリティカルシンキングの手法について	36	52.2%	23	33.3%	6	8.7%	4	5.8%
		(3)３日間の活動についてのねらいについて	40	58.0%	20	29.0%	6	8.7%	3	4.3%

生徒自身のキャリア目標と研究内容の興味の相関を分析した。国際教養大学での活動が最もキャリアニーズに近い数値結果となったのは，英語を活用した内容であったことが，大学入試と直結している影響が高いことからによるものと考えられる。また，留学に関する内容となったテーマも高い興味を示していることが伺える。

一方で，直接キャリアに関係しない内容と判断した項目については，その話だけを直接的に捉える傾向が強く，教養教育の視点で生徒が捉えきれていない結果である。探求型教育として，生徒に幅広く興味，関心をもたせる試行が必要である。

③「学校設定教科（課題探求型学習）学校設定科目（探求基礎)」授業構想

授業手法研究（探求学習サイクル）５０分授業×４コマを１サイクルとして活用。研究テーマの内容により，サイクルを拡大した。

研究方法	目的	目標	想定時間
講演・授業	「基礎を知る」 不思議に気づける（疑問や発見）	講演を通じて各テーマに於ける情報を「知っていたこと・知らなかったこと」に分類し疑問や発見を見出す。	聴講 ６０～７０分
			質疑・振り返り ４０～３０分
個人研究	「知りたいを見つける」 知らないということを知る機会を創る。	知らなかったことに対し，自分との係わりについて自問自答を通じて，興味を持たせる知りたいことを明確化する。	①授業中 ②家庭学習 探求基礎調書を策定し，全員が同一書式にて記載
グループ探求	「新たな知識を得る」 同一テーマによりそれぞれが感じた内容を明文化し，その違いを理解する。 グループとして協働活動を通じ，他者との違いを理解する。	複数の視点をもつグループ活動の中で，自分の考えや視点を主張することで，自主性を芽生えさせる。また，他者の主張を聞き，その考え方やアプローチの違いなどを理解させながら，グループとしての発表に導く。	グループディスカッション 50 分
			プレゼンテーション ５０分／１チーム １０分

（３）教育課程外の取り組み

①高校生模擬国連

教育外活動として，ユネスコの主催する高校生模擬国連大会に参加を即した。８名４チームから参加申し込みがあり，学内選考の結果２チームをエントリーした。内，１チームが全国大会へ出場した。

２．英語力向上の取り組み

①オーストラリア領事館領事，米国領事館領事を招いた研究授業では，オール英語による授業を実施し，聞くことによる理解の促進を行った。

②フィールドワークの国際教養大学では，３泊４日を留学生と過ごし，また，プログラムは英語で実施した。また，最後の生徒によるプレゼンテーションも英語で実施。

③北海道庁と連携し北海道を訪問（台湾・タイなど）する外国の高校生，大学生などの教育研究を積極的に受け入れた。

３．グローバルマインド向上のための取り組み

（１）教科での授業改善

グローバル化の進展に対応できる人材育成を目標とした探求型学習の研究を主体としたＳＧＨ「探求基礎」に着手した。計画段階では，「探求基礎」１単位・「総合的学習の時間１単位」を探求基礎として行い，他教科も並行して探求型授業の研究に着手した。

ＳＧＨ受講生徒は単元の学習を進めるにあたり，大学・企業の外部講師の授業に参加した後，グループによる課題学習やレポート，プレゼンテーションの学習を行った。学習の評価は，レポートや発表を評価する手法をとり，いわゆるペーパーテストによる評価は行っていない。

次年度は，「探求基礎」以外の教科において，探求型学習の手法を取り入れた時間数を増やし，パフォーマンス評価の実践にも取り組むこととしたい。

（２）海外校との連携・海外留学支援

①姉妹校との連携

・オーストラリア姉妹校へイリベリー高校から１９名の生徒を２週間受け入れ，日本文化とオーストラリア文化の交流を行った。

②語学・異文化留学

・千歳市主催の留学制度に１名参加した。
・ケンブリッジ大学イースタープログラムに４名の生徒が３週間に渡り参加した。
・公益財団法人イオンクラブ主催（政府間レベル）の高校生交流事業に応募し採用され，中国とのティーンエイジ・アンバサダー事業に参加（２０名）する。（実施は平成２８年７月～１０月で招聘と派遣）

③飛びたてジャパン高校生

・参加説明会には４２名が参加し，１８名が応募した。学内選考で１０名に絞り１０名の申請を行った。

④交流

・台湾　臺北市立大安高級工業職業學校の訪問を受け，日本文化（教育・北海道の観光）について交流を行う。
・中国　上海文來高校の訪問を受け，日本文化について交流を行う。

４．成果の発信・広報

（１）学校ホームページ

既に作成していたホームページに「スーパーグローバルハイスクール」を追加し，日本語版・英語版を平成２７年６月２０日に完成させた。内容は，研究授業，フィールドワークなどの活動内容を掲載している。

（２）ＳＧＨ通信

ＳＧＨ通信を発行し，近隣の大学・高等学校・中学校始めとした教育機関に郵送し，活動内容の紹介と理解を求めた。

（３）シンポジウム等への参加・学校視察の受け入れ等

①シンポジウムへの参加（北方領土の日）

２月７日は「北方領土の日」として政府主催で「北方領土返還要求全国大会」が，東京で開催されるほか，全国各地で講演会やパネル展，返還実現のための署名活動などさまざまな取組が行われている。

札幌会場では「北方領土フェスティバル」と題し，政府・道知事・市長を始めとした関係者がこの問題に対して講演が行われました。そのステージに，本校生徒４名が研究した内容を２０分

間に渡り発表・主張を行った。

②学校視察の受け入れ

・平成２７年１０月８日（木）日本大学三島高等学校から教員３名による学校視察の受け入れを実施した。

・平成２７年１１月４日（水）タイ国　ラムカムヘン大学　教育学部　大学院生９０名の学校視察を受け入れた。

Ⅲ．目標の進捗状況，評価

１．生徒の変容

（１）意識の変容

①グローバルな課題への理解，興味・関心　②学習意欲　③将来の進学・就職等に対する意欲・意識　④海外での学習，海外旅行に対する意識　について生徒にアンケートを実施した。

【アンケート結果（平成２７年５月実施）】

		生徒本人									
		5		4		3		2		1	
		とてもそう思う		そう思う		どちらでもない		あまり思わない		全く思わない	
1	あなたは，現在，受け身ではなく，主体的に学習を行っていると思いますか。	5	7.6%	25	37.9%	21	31.8%	11	16.7%	4	6.1%
2	あなたは，物事を論理的に考える力があると思いますか。	7	10.6%	7	10.6%	28	42.4%	20	30.3%	4	6.1%
3	あなたは，身近な地域の課題に興味・関心がありますか。	11	16.7%	33	50.0%	9	13.6%	9	13.6%	4	6.1%
4	あなたは，国際的な社会課題に興味・関心がありますか。	19	28.8%	22	33.3%	12	18.2%	8	12.1%	5	7.6%
5	あなたは，伝えたいことを論理的に伝えたり発表したりする力があると思いますか。	1	1.5%	10	15.2%	23	34.8%	22	33.3%	10	15.2%
6	あなたは，他の人と協同して学習することが大切だと思いますか。	32	48.5%	23	34.8%	7	10.6%	3	4.5%	1	1.5%
7	あなたは，自ら課題を見つける力があると思いますか。	5	7.6%	18	27.3%	27	40.9%	14	21.2%	2	3.0%
8	あなたは，課題を進んで解決しようとする行動力や使命感があると思いますか。	10	15.2%	26	39.4%	19	28.8%	8	12.1%	3	4.5%
9	あなたは，課題の解決に向けた有益な考えを構築する力があると思いますか。	4	6.1%	18	27.3%	35	53.0%	8	12.1%	1	1.5%
10	あなたは，課題の解決に向けて，自分とは異なる考え方も大切だと思いますか。	45	68.2%	17	25.8%	3	4.5%		0.0%	1	1.5%
11	あなたは，様々な情報を集め，整理する力があると思いますか。	8	12.1%	18	27.3%	23	34.8%	14	21.2%	3	4.5%
12	あなたは，自ら考え，調べたことを広く情報発信する力があると思いますか。	4	6.1%	9	13.6%	22	33.3%	23	34.8%	8	12.1%
13	あなたは，英語を使ったコミュニケーションが大事だと思いますか。	41	62.1%	15	22.7%	5	7.6%	3	4.5%	2	3.0%
14	あなたは，英語を使ったコミュニケーション力があると思いますか。	2	3.0%	10	15.2%	19	28.8%	22	33.3%	13	19.7%
15	あなたは，自らを追い込み，最後までやり抜く忍耐力があると思いますか。	15	22.7%	21	31.8%	19	28.8%	8	12.1%	3	4.5%
16	あなたは，新しいものを生み出す創造力があると思いますか。	6	9.1%	14	21.2%	29	43.9%	13	19.7%	4	6.1%
17	あなたは，将来の進路について，明確な方向性を持っていますか。	18	27.3%	19	28.8%	16	24.2%	7	10.6%	6	9.1%
18	あなたは，自らの進路は，自らが切り開くべきものだと思いますか。	43	65.2%	17	25.8%	3	4.5%	3	4.5%		0.0%
19	あなたは，将来，地元地域のために貢献すべきだという使命感を持っていますか。	16	24.2%	21	31.8%	18	27.3%	9	13.6%	2	3.0%
20	あなたは，将来，国際社会のために貢献すべきだという使命感を持っていますか。	17	25.8%	16	24.2%	19	28.8%	7	10.6%	7	10.6%

（アンケート検証）

・物事を論理的に考える力，自らが課題を発見しようとする力，様々な情報を集め整理する力，新しいものを生み出す創造力の４項目が苦手であると回答していた。まさに，グローバルリーダーとなるべき素養の部分に自信を持ちえていない状況であった。

・その一方で，自らの進路は自らが切り開くべきものである，国際的な課題に関心がある，地域の課題に関心があるなどの意識部分は高い結果であった。

・協働性に係わる項目は非常に高い意識を持っていた。

・未成熟な内容は多い結果であったが，前向きに取り組もうとする意識は高いことがわかった。その気持ちをどのように実現化させていくのかが課題として残っている。

【アンケート結果（平成２８年３月実施）】

		生徒本人									
		5		4		3		2		1	
		とてもそう思う		そう思う		どちらでもない		あまり思わない		全く思わない	
1	あなたは，現在，受け身ではなく，主体的に学習を行っていると思いますか。	6	8.8%	24	35.3%	20	29.4%	15	22.1%	3	4.4%
2	あなたは，物事を論理的に考える力があると思いますか。	4	5.8%	23	33.3%	29	42.0%	9	13.0%	4	5.8%
3	あなたは，身近な地域の課題に興味・関心がありますか。	9	13.0%	33	47.8%	16	23.2%	7	10.1%	4	5.8%
4	あなたは，国際的な社会課題に興味・関心がありますか。	16	23.2%	30	43.5%	13	18.8%	5	7.2%	5	7.2%
5	あなたは，伝えたいことを論理的に伝えたり発表したりする力があると思いますか。	3	4.3%	21	30.4%	27	39.1%	15	21.7%	3	4.3%
6	あなたは，他の人と協同して学習することが大切だと思いますか。	29	42.0%	27	39.1%	11	15.9%	2	2.9%		0.0%
7	あなたは，自ら課題を見つける力があると思いますか。	5	7.2%	20	29.0%	31	44.9%	12	17.4%	1	1.4%
8	あなたは，課題を進んで解決しようとする行動力や使命感があると思いますか。	12	17.4%	23	33.3%	21	30.4%	11	15.9%	2	2.9%
9	あなたは，課題の解決に向けた有益な考えを構築する力があると思いますか。	2	2.9%	25	36.2%	33	47.8%	7	10.1%	2	2.9%
10	あなたは，課題の解決に向けて，自分とは異なる考え方も大切だと思いますか。	37	53.6%	25	36.2%	6	8.7%	1	1.4%		0.0%
11	あなたは，様々な情報を集め，整理する力があると思いますか。	4	5.8%	28	40.6%	28	40.6%	9	13.0%		0.0%
12	あなたは，自ら考え，調べたことを広く情報発信する力があると思いますか。	3	4.3%	22	31.9%	28	40.6%	12	17.4%	4	5.8%
13	あなたは，英語を使ったコミュニケーションが大事だと思いますか。	37	53.6%	25	36.2%	3	4.3%	1	1.4%	3	4.3%
14	あなたは，英語を使ったコミュニケーション力があると思いますか。	3	4.3%	12	17.4%	21	30.4%	21	30.4%	12	17.4%
15	あなたは，自らを追い込み，最後までやり抜く忍耐力があると思いますか。	9	13.0%	23	33.3%	23	33.3%	9	13.0%	5	7.2%
16	あなたは，新しいものを生み出す創造力があると思いますか。	2	2.9%	23	33.3%	22	31.9%	17	24.6%	5	7.2%
17	あなたは，将来の進路について，明確な方向性を持っていますか。	13	18.8%	29	42.0%	16	23.2%	8	11.6%	3	4.3%
18	あなたは，自らの進路は，自らが切り開くべきものだと思いますか。	32	46.4%	24	34.8%	10	14.5%	2	2.9%	1	1.4%
19	あなたは，将来，地元地域のために貢献すべきだという使命感を持っていますか。	11	15.9%	20	29.0%	24	34.8%	9	13.0%	5	7.2%
20	あなたは，将来，国際社会のために貢献すべきだという使命感を持っていますか。	11	15.9%	22	31.9%	21	30.4%	8	11.6%	7	10.1%

（アンケート検証）

・約８ヶ月の研究後の生徒の意識変化を調査した。全般的な傾向は，開始５月と比較して３月時点

で生徒の意識変化に大きな変化は発生していないと考えられる。

・変化の傾向があったのは，２・５・１１・１２の質問項目で，これらの項目は，経験からくる生徒の自信がアンケートに反映されたものと考えられる。従って今まで取り組んできた手法と異なる効果が現われたと考えられる。

・どちらかと言えば，消極的であった生徒が，多様な経験（発表・調査・議論）を通じて，積極的な姿が頭角してきたと考えられる。

（２）能力・技能の変容

①論理的思考力，判断力，表現力，創造性

②英語のコミュニケーション能力

③英語検定資格取得の推移（ＳＧＨ該当生徒）

ＣＥＦＲ	英語検定	平成２７年６月現在			平成２８年１月現在		
		女子	男子	計	女子	男子	計
Ｂ２	準１級						
Ｂ１	２級	４		４	９	１	１０
Ａ２	準２級	１４	１１	２５	１２	１４	２６
Ａ１	３級	１１	８	１９	１０	６	１６
	４級		２	２		１	１
	５級					１	１
	取得なし	４	１５	１９	２	１３	１５
	計	３３	３６	６９	３３	３６	６９

④平成２７年度ＧＴＥＣ（平成２７年１２月実施）結果

全校に英語コミュニケーションの活動を広げるため，高１年から２年までの全学年・全コース生を対象にＧＴＥＣ（ベネッセ主催）を実施した。

	ＣＥＦＲ	一貫コース	特進コース	総合進学コース	計
高校２年生	Ｂ２	０	０	０	０
	Ｂ１	２	０	０	２
	Ａ２	４６	２６	０	７２
	Ａ１	３１	８１	１５５	２６７

	ＣＥＦＲ	一貫コース	特進コース	総合進学コース	計
高校１年生	Ｂ２	０	０	０	０
	Ｂ１	３	０	０	３
	Ａ２	３３	２８	２	６３
	Ａ１	３１	７４	１５６	２６１

２．教員および学校の変化

（１）グローバル人材育成に対する意識

〔探求基礎指導教員〕

①各教員ともにグローバル人材育成に対する意識は高い。しかし，教科指導の中に探求型学習を

取り入れる教材の工夫が課題となる。探求型の授業スタイルは構築できるが，取り扱うテーマに課題が残る。

②できるだけ多くの経験を積ませながらの授業展開を行うことの重要性を感じる。

③外国語のコミュニケーション能力は当然必要だが，日本の文化・歴史・生活習慣などに関して，創意工夫をした教育が必要であると痛感した。いわゆる一般教養の重要性を意識させられた。

④主体性・積極性・チャレンジ精神の前向きな姿勢は生徒が意識するようになった。

⑤大学・企業と協働して単元の授業を指導することにより，指導方法に新たな発見があった。

⑥探求型学習は，５０分連続１００分程度の長い時間を必要とする。

〔海外フィールドワーク研修引率教員〕

①シンガポール研修では，現地の高校生の積極性や表現力の豊かさが印象的であった。本校の生徒は引っ込み思案や表現力の幼稚さが目立った。この背景は，経験不足による自信のなさが要因と考えられる。

②「グローバル人材＝外国語が達者である」と思っていた生徒が多いように感じられたが，語学はツールであり，交渉力の大事さを痛感したようであった。

③机上の知識だけでは，まったく通用しないことを理解したようであった。

（２）グローバル人材育成のための指導方法の改善

①ＳＧＨ推進委員会の新設

ＳＧＨの各事業を推進するため，学内にＳＧＨ推進委員会を新設した。副校長・教頭と担当教員４名及び担当学年教員３名体制で連携先の大学・企業・官公庁・領事館との企画・運営を行った。

②学年との連携

中高一貫コース１年生３クラス全員がＳＧＨ受講生となる関係で，１学年団の担任が全員研究に取り組む体制とした。

（３）教員間の連携・協力，指導体制

「探求基礎」では，ＳＧＨ対象生６９名を１講座として授業を進めることから，副校長，教頭，担任３名，社会科教員２名，英語科教員１名で授業を進めた。

（４）大学・企業との連携・ネットワーク

①大学との連携

北海道大学観光高等研究センターから３名の講師を向かえ「探求基礎」での連携授業を実施した。特に発展途上国での自然，歴史を資産とした観光業構築の流れや政府との係わりなど，３名の講師の実体験を伺いながら観光産業の基礎を学んだ。

②企業・官との連携

国土交通省運輸局，北海道庁経済部から４名の講師を向かえ「探求基礎」（北海道の経済，北海道の産業，国が計画実施している観光施策などを伺い）での連携授業を実施した。ＪＴＢグループから２名の講師を向かえ，「探求基礎」におけるグローバルな時代での働くことへの指針を提示していただいた。

③在領事館との連携

オーストラリア領事館・米国領事館から領事を招き，「探求基礎」（各国と北海道の係わり・各国への留学制度など）の説明や課題についてお話を英語で伺った。

３．外部評価

（１）運営指導委員会

第１回ＳＧＨ運営指導委員会

日　時：平成２７年９月８日（火）　１１時００分～１６時００分

会　場：札幌日本大学中学校校舎　会議室・レセプションホール

出席者：株式会社　北海道新聞社　論説委員室　論説委員　貴志雅之
公益社団法人　北海道観光振興機構人材育成・サービス向上グループ
斉藤伸子担当部長
学校法人　札幌大学　地域創生学群　小山茂教授
国立大学法人　小樽商科大学　商学部　船津秀樹教授
札幌商工会議所　国際・観光部　鈴木伸明部長

議　題：①指定経緯説明（学校長）②事業取り組み説明（副校長）
学校長よりスーパーグローバルハイスクール指定に関する本校の方針，取り組み，現状に関する説明を行なう。開会挨拶続いて，事業責任者の副校長より，配布資料の説明を行なう。全体会では，運営指導委員の先生方に，本校の構想と具体的取組の計画について理解を求めた。
③授業視察
アクティブ・ラーニング後の探究報告として，2 グループが説明を行なう。
・北方領土問題研究（指導教員　辻・宮間）
・北海道の観光研究（指導教員　多津美・斉藤力）

【出席者からの意見・指導】

（生徒の研究発表について）

- 非常に難しいテーマに取り組まれており，今後の展開に期待したい。北方領土問題は，北方領土単体で解決策などを検討するよりも，世界で様々な対立がおきていることを広く捉らえることが大切である。是非，海外フィールドワークなどを通じて，他の国々の方の考え方を調査されると良い。（船津　秀樹先生）
- 北海道観光振興会として，高校生がこのような取り組みをされていることに感銘を受けている。北海道は自然豊かであり，自然と食に，冬季シーズンが主な財となっているが，まだまだ，海外の認知は低く，是非高校生の斬新な検討を期待している。（斉藤　伸子先生）
- 商工会議所として，企業を通じた課題研究への取り組みに積極的に協力していきたい。（鈴木　伸明先生）
- 積極的な取り組みである。英語で調査しようと努力していることも評価できる。特に，文化の違いを英語表現で認識することは難しいが，身振り手振りでのコミュニケーションも必要であったと感じられた。是非，英語表現力のレベルを高めて欲しい。（貴志　雅之先生）
- 英語表現が非常に優れていた。読み上げるだけではなく，伝えようとするコミュニケーションが良かった。（小山　茂先生）
- 英語でのクリティカルシンキングを体験されたことは非常に興味深い。また，グローバル大学との連携により，生徒もより身近に感じ，グローバル大学への進学を意識できたのではないか。今後，学校の教科指導にどのように取り組んでいくのかが学校の取り組みとして重要である。（船津　秀樹先生）

（指導体制について）

・ 全体的に生徒が積極的に取り組んでいる。また，英語表現が高いレベルにあるように感じる。（斉藤　伸子先生）

・ 社会記事を新聞やニュースを通じて，積極的に考える時間をとることが重要。記事の内容そのものよりも，今，世界でどのようなことが起きているのかを知ることが重要で，興味深く取り組んで欲しい。（貴志　雅之先生）
・ 探求型の学習は，大学でのアクティブ・ラーニングであるが，生徒の中で中心的にリーダーとなるべく環境を策定することが必要。積極的にグループ討議に参加できる環境は，リーダーの進行手法にかかっている。そのようなリーダー教育を行うことも必要。（小山　茂先生）

第２回ＳＧＨ運営指導委員会

日　時：平成２８年３月１７日（木）　１１時００分～１６時００分
会　場：札幌日本大学中学校校舎　会議室・レセプションホール
出席者：株式会社　北海道新聞社　論説委員室　論説委員　坂本和之社員
公益社団法人　北海道観光振興機構人材育成・サービス向上グループ
斉藤伸子担当部長
学校法人　札幌大学　地域創生学群　小山茂教授
国立大学法人　小樽商科大学　商学部　船津秀樹教授
札幌商工会議所　国際・観光部　鈴木伸明部長
北広島市教育委員会　教育部　鹿野　秀一次長
議　題：
①平成２７年度事業報告（学校長）
学校長より平成２７年度事業実施の状況報告を行った。
②平成２７年度事業報告（副校長）
副校長より，本報告書に基づき平成２７年度研究課題の取り組みと検証報告を行った。また，当初計画の目標進捗状況の報告も行い，概ね目標到達である旨報告を行った。
③平成２８年度事業計画（副校長）
平成２８年度研究計画の説明を行った。
④平成２７年度研究報告（生徒による研究発表）
各テーマとも，指導教員による指導報告を実施後，生徒の発表を行った。
ア）シンガポールの高校生を日本に誘致する研修旅行企画書プレゼンテーション
・２グループの生徒による企画書の発表をパワーポイントで行った。１グループは，英語で発表を実施することができた。両グループとも，北海道の観光，食文化，教育制度などに触れた内容であった。
・２グループとも，シンガポール海外研修に参加する事から，現地高校との交流活動でプレゼンを実施する。
イ）北方領土問題プレゼンテーション
・北方領土の日の発表に向けての，プロセス説明と当日の署名活動，元島民の方のインタビュー，各団体の方へのインタビュー結果を踏まえ，現状の課題と高校生で実施可能な施策を発表した。
ウ）高校生模擬国連参加者による交渉力プレゼンテーション

・高校生模擬国連に参加して，交渉力，英語表現力，知識力などに於いて，未成熟であった体験から，今後の研究に向けての取り組みを報告した。
・膨大な資料を読み込み，各方面へのインタビューなどを通じた，実経験の主さを振り返り，アプローチの重要さを感じた報告であった。

【出席者からの意見・指導】

（平成２７年度研究報告について）

・「統計資料に関して生徒が理解を示さなかった課題について」
各方面から示された統計データについて，高校生が理解しやすい示し方の工夫により，探求型の取り組みが成立するのではないか。（小山茂先生）

・「教材の策定について」
授業研究，教材策定のため授業研究のビデオ撮りを行ってはどうか。それらの資料をマニュアル化すべきではないか。と意見が出され，新年度に向けて改善することとした。（鹿野秀一先生）

・「高大連携について」
高大連携については，大学生と高校生が同じテーマで一緒になり活動することが望ましいのではないか。また，その活動を単位の互換性を持たせることで，より精度の高い連携ができるのではないか。（船津秀樹先生）

（生徒の研究発表について）

ア）シンガポールの高校生を日本に誘致する研修旅行企画書プレゼンについて

・体験型のプラン計画を多く取りこんでいて面白い内容であった。北海道は食において農家が積極的に体験受け入れを行っているので，一緒に活動すれば良いのではないか。（船津秀樹先生）
・観光振興をしている者として，高校生らしい発表内容であった。海外研修で是非ＰＲをして来て欲しい。（斉藤伸子先生）

イ）北方領土問題プレゼンテーション

・発表内容において，双方の意見，主張を理解しながら，まとめた内容はすばらしいものであった。４島返還，２島返還の意見も元島民によっても意見が異なることがあり，答えのない問題に取り組んだことを評価したい。（坂本和之先生）
・前回の報告から随分と主張内容や分析力が進歩していた。特に，元島民の方や多方面にインタビューを行っていたことにより，真実をおびた発表となっていた。（船津秀樹先生）

ウ）高校生模擬国連参加者による交渉力プレゼンテーションについて

・大変すばらしい発表であった。まさに答えのない課題に取り組み，また，客観的に分析を行い，自らの課題を改善しようとしている姿は，グローバル人として評価できるものであった。（坂本和之先生）
・膨大な資料を探し，分析した活動は，是非，次の学年の生徒にも伝えられるよう指導書づくりをお願いしたい。（小山茂先生）

Ⅳ．今後の課題及び改善の方向性

１．課題研究の取り組み

（１）探求基礎

①「探求基礎」を１単位，総合的学習の時間を１単位として開始したが，研究時間に不足（グループワークを通じたディスカッション，調査時間など）が生じ時間外学習を行った。次年度から「探

求基礎」を１単位増として，全体で２単位から３単位体制で研究を行う計画である。

②指定を受けて大学，企業との日程調整を行ったため，先方の都合で継続した研究が進められないことがあり生徒が混乱したケースがあった。次年度は早期に日程の調整に入っている。

③全体的な計画は予定通り実施した。

（２）海外研修

構想調書に記載した通りの計画で実施した。シンガポールを訪問国として実施したが，大学，企業との研究，交流活動は比較的研究先と提携することは容易であったが，高校交流活動は，先方の要望と本校の内容が中々一致せずぎりぎりまで実行計画の策定が出来なかった。次年度は，ベトナム，タイも候補として交流先を模索することにしている。

（３）課題研究ワークショップ

「探求基礎」学習成果発表会に向けて，プレゼンテーションのノウハウを学ぶワークショップを兼ねて，国際教養大学のフィールドワークを企画して参加した。英語によるクリティカルシンキングを始めとした，英語の発表研究が大変参考となった。

２．英語力向上のための取り組み

（１）外部講師による研究授業（豪州・米国領事館の協力を得て）を３授業において，外国人領事館講師による英語による異文化の相違事例研究を実施した。

（２）次年度より英語科で取り入れる，英字新聞作成プログラムを研究した。題材は，世界におけるニュース新聞を作ることとし，グループ学習として取り入れることとした。

（３）外部検定受検の取り組みとして，現在採用（全学年全員受験）しているＧＴＥＣ for ＳＴＵＤＥＮＴＳは継続実施とし，他に，ケンブリッジ英語検定，ＴＯＦＬなどの受検を推進する。２年後にはケンブリッジ英語検定，ＴＯＦＬなども選択受検化を目指すこととした。

３．グローバルマインド向上の取り組み

（１）講演会の開催

本年度は計画をしていたが，ＳＳＨ事業との相乗り形式をとり実施した。次年度は，相乗りで１回，ＳＧＨで１回を計画しＳＳＨ事業と合わせ２回の講演を検討している。

（２）校外での研修会への参加

本年度はフィールドワーク以外では，校外研修を実施できなかった。次年度は北海道大学，企業と連携し校外研修を企画している。また，北海道庁，国土交通省などの公的機関主催のイベント，シンポジウムに積極的に参加させ考える機会を与えたい。

Ⅴ．課題研究外報告

１．高校生模擬国連

（１）参加推進

ＳＧＨ受講者６９名に対し，高校生模擬国連開催，応募について説明を行った。説明会実施後，８名（４チーム）の参加申し出があり，１学校２チームエントリー制限があることから学内予選を実施することとなった。

（２）指導

①本年度のテーマが「移民」に関する内容となった。先ず，示された書物を読み解くことが条件となされており，また，英文によるレポートが課されていることから，国語科・地歴公民科・英語科の教員プロジェクト体制を敷いた。

②参加希望者８名に対し，前年度全国大会出場の高校２年生より，全国大会での様子や予選提出の書類に関する助言を行った

③１学校２チーム４名の参加しか出来ない為，４チームによるプレゼンを行い，２チームを予選に登録した。

④２チームの内，１チームが予選を通過し全国大会に出場することとなった。全国大会用の提出物策定にあたっては，社会科・英語科が中心となり，また，北海道新聞社論説室に指導に加わっていただいた。

２．飛びたてジャパンへの参加について

（１）参加推進

ＳＧＨ受講者６９名に対し，飛びたてジャパン事業の説明を実施した。詳細説明会には，４５名の生徒が参加し，学内予選を実施することとした。最終エントリー希望者は１８名となり，学内選考を実施し１０名に絞った。

（２）指導

提出書類は生徒が中心となり策定したが，留学先計画については，「異文化交流推進ネットワーク」に相談の窓口をお願いし，生徒が個々にアドバイスを受けた。

３．イオン１％クラブが主催する，高校生交流活動に応募し，中国交流の高校として採用された。相互交流にあたっては，２０名の生徒を参加（平成２８年７月と１０月予定）

Ⅵ．フィールドワーク研修報告

【国際教養大学】

１．実施目的

探求基礎の課題研究である３研究課題を，フィールドワークを通じて調査する。

○世界規模の経済活動を，日本と北海道の対比を行いながら，北海道の現状の課題を探究。クリティカルシンキングの手法を体験する。

○国際観光都市北海道の価値を高めるため，調査研究（対外国人）を実施し，北海道観光へのニーズ調査からその課題を取り上げた課題探究（インタビュー）を行う。

○北方領土問題に関する歴史的背景，政治活動，現在の国交交渉についての課題を探究とする。

２．研修先及び研修内容

（１）研修先

公立大学法人国際教養大学（Akita International University All Rights Reserved）
秋田市雄和椿川字奥椿岱

（２）研修内容

□Ａグループ

①スーパーグローバル指定大学と連携し，海外大学進学や海外留学を目指すスキルの向上を図る。

②３泊４日の研究時間を，留学生と共に研究活動や生活を通じて，異文化研究を行う。

③３泊４日の研修言語は英語を用いて，英語コミュニケーションの習得を図る。

④Ａグループは，留学生に対して準備したインタビューを積極的に行い，諸外国の学生が持つ北海道に対する意識を調べる。

□Ｂグループ

①スーパーグローバル指定大学と連携し，海外大学進学や海外留学を目指すスキルの向上を図る。

②３泊４日の研究時間を，留学生と共に研究活動や生活を通じて，異文化研究を行う。

③３泊４日の研修言語は英語を用いて，英語コミュニケーションの習得を図る。

④Ｂグループは，国際教養大学でのプログラム「クリティカルシンキング」を中心とした活動を

行う。

３．研修団

□Ａグループ　引率　副校長・教員１名　参加者　男子２２名　女子１２名

□Ｂグループ　引率　教　頭・教員２名　参加者　男子１４名　女子２０名

４．研修行程

Ａグループ８月２日～５日　・　Ｂグループ８月９日～１２日			
月日		行程表	食事
第１日	８月２日 ８月９日	飛行機：新千歳空港→秋田空港	留学生・大学院生・学部生と学食
		バス：秋田空港→国際教養大学	
		バス：国際教養大学→市内ホテル	
		着後　大学見学・留学生との交流	
第２日	８月３日 ８月 10 日	バス：市内ホテル→国際教養大学	留学生・大学院生・学部生と学食
		バス：国際教養大学→市内ホテル	
		終日　グループワーク	
第３日	８月４日 ８月 11 日	バス：市内ホテル→国際教養大学	留学生・大学院生・学部生と学食
		バス：国際教養大学→市内ホテル	
		終日　グループワーク	
第４日	８月５日 ８月 12 日	バス：市内ホテル→国際教養大学	留学生・大学院生・学部生と学食
		バス：国際教養大学→秋田空港	
		飛行機：秋田空港→新千歳空港	

５．研修報告書

（１）Ａグループ８月２日～５日

①留学生に積極的にインタビュー（北海道・日本文化・国の文化）を行うことを課題に掲げフィールドワークを実施した。予め準備していったインタビュー内容を英語でチャレンジした。最初の会話はやりとりが出来ていたが，話が進むに連れて会話が続かなくなる状況であった。

②食事などの日常会話は，積極的に行っていた。

③プレゼンテーションは，グループ毎の留学生の国に関する文化の発表を行った。留学生に手助けをしていただき，何とか英語で発表ができる状況となった。生徒は，当初はかなり苦戦を強いられていたが，だんだんと慣れてくるに従って，プレゼン資料の作りも工夫されるようになった。

④６グループ全員がプレゼンを英語で実施した。

⑤生徒参加報告（抜粋）

（参加生徒　女子）

◆フィールドワークに参加した目的と達成状況

今回このフィールドワークに参加した目的は，ただ英語を学ぶだけでなく，実際に大学ですべて英語のみという環境で，いかに留学生とコミュニケーションをとりコミュニケーション力を向上させるかである。また国際的な取り組みをしている大学の学生，そして留学生にグローバル意識の調査をすること。そして，私たちが前もって考えた北海道の観光発展に関する研究課題の市場調査である。今回の活動で達成できたことは，留学生とのコミュニケーションである。活動

の中の留学生のインタビューで，色々な質問を英語ですることで，留学生とのコミュニケーションの仕方を覚えることができ，北海道に関する質問をすることで，自分たちが普段の生活では感じられなかった北海道独特の文化や北海道の魅力について知ることができた。これらによって，課題であった北海道の観光発展に関する市場調査ができ，多少ではあるが，北海道の経済問題について考えることができた。

ただ，留学生のグローバル意識までは調べることができなかった。原因として，期間が短かったというのもあるが，知識不足が前提にあったためである。そもそもグローバル意識とは具体的になにか自分で分かっていないと相手に聞くことはできない。そのため今後は事前にしっかり調べ，自分の中でちゃんと理解してから活動を行ないたいと思う。

◆フィールドワークを通じて学んだこと（学問，手法，ものの考え方など）

授業では‘英語で説明してみよう’や‘英語で言ってみよう’，‘留学生にインタビュー’，‘プレゼンテーション’など色々な活動があった。‘英語で説明しよう’と‘英語で言ってみよう’という活動では日本語では分かるが英語での言い方がわからない単語をいかに自分が知っている単語で説明・表現するというものである。この活動によって自分の英語力でも伝えることができるという自信にもつながって，和英辞典など使わなくても説明できるということが学べた。‘留学生にインタビュー’では各グループの留学生に５分ずつインタビューをし，文化の違いや母国の話や日本に来た目的など色々な話をした。ここではその場で質問を考えるので，話の広げ方や相手とのコミュニケーション力がとても大切である。私たちのグループの学生さんは，とにかくたくさん質問することが大切であると言っていた。つまりインタビューでは質も大切だが量も大切であるということである。

◆学んだこと，経験したことを今後に活かす具体的な活動（研究も活動とする）

‘プレゼンテーション’では効果的なプレゼンテーションについて学んだ。スライドについては，すべての情報を載せない，図（写真・表）で素早く効率的に情報やアイデアを伝える，難しい語彙を使うときは聞き手に分かるように説明する，スライドに書いてある文章を読み上げるのはダメなど，スライドを作るにあたって気をつけることを学んだ。語彙・文法については，聞き手は誰かを常に念頭に置いてプレゼンする，聞き手の英語力を考える，原稿を作るときは英和辞典を使わないなど，プレゼンテーションの原稿を作るときに気をつけることを学んだ。プレゼンテーションをするにあたって聞き手を巻き込むことが重要なので，プレゼンターが一方的に話さず，質問をするなど語りかけることで聞き手がプレゼンに参加できる。ただ質問をするだけでなく，相手を感嘆させより話をひろげる目的で問いかけることが大切である。プレゼンテーションは場面によって，カジュアルにしたりフォーマルにしたりなど使い分けることが必要である。などプレゼンテーションについて注意すべきところ・考えることがたくさんあった。今後プレゼンテーションをすることがたくさんあると思うので，学んだことをしっかり覚えて活かしていきたい。

◆フィールドワークを通じて感じた文化（食・生活・地域の習慣など）の違いをどのように受け止めたのか。

留学生のインタビューでいろんな国の人と交流したことでさまざまな文化を感じることができた。イタリアはピザとパスタは毎日食べるといった食文化，いろんなジェスチャー，コンビニがないこと。中国は赤ちゃんに名前を付けるとき占いによって決めること，中国人の名前は姓・世代名・名前の順であり，車は右側通行で左ハンドルであること。香港は冬がとても寒く，湿度が年間通して高く，通貨は香港ドルであること。イギリスでは紅茶が有名で食事のときは必ず飲むこと，食べ物は日本食に比べ濃い，博物館・美術館が多いこと。制限時間は５分ということで

あまり深くは知ることはできなかったかが，５分でも今まで知らなかったいろんな国の文化を知ることができた。

プレゼンテーションは各グループに就いている留学生について紹介をする。私たちのグループはフィリピン出身の留学生だったのでフィリピンについてたくさん留学生にインタビューをした。まず，食文化において，フィリピンも日本同様に米が主食である。ただ米の形が日本より細長いそうだ。また日本食は野菜が多くとてもヘルシーであると言っていた。フィリピンの食べ物は味が強く，唐辛子やココナッツミルクが特に有名である。唐辛子は食事のときに必ずかけ，チリアイスクリームといった唐辛子と牛乳で作ったアイスクリームがフィリピンでは人気である。ココナッツミルクは日本では飲み物として使われるが，フィリピンでは料理に使います。ギナタンアドボという鶏肉と唐辛子とココナッツミルクで作られる有名な食べ物がある。食事の際フィリピンではスプーンとフォークを使う。フィリピンで有名な果物といえばバナナだが，フィリピンではバナナは勝手に取っていいそうだ。取るときに，‘Pahingi　Po’と言う必要がある。日本では考えられない文化に驚いた。フィリピンタイムというのも日本にはないものである。具体的にいうと 10 時に待ち合わせのとき，日本では 10 時前あるいはちょうどに行くが，フィリピンの人は２，３時間普通に遅れて来るそうだ。日本と違って時間に縛られないで自由なところは，フィリピンのいいところであり素晴らしいなと思った。フィリピンは多民族国家である。１００以上もの民族があり，公用語の英語とタガル語と各地域や民族の言語の３ヶ国語を使っている。日本人からすると頭が混乱しそうだが，耳から入って自然と覚えるのでさほど難しくはないらしい。しかし，各地域や民族の言葉は分からないときもあるそうだ。その留学生が言うには，ひらがな・カタカナ・漢字を同時に使う日本語の方がとても難しいと言っていた。我々が普段自然に使っている言葉も外国の人からするととても複雑であることが分かった。

◆グローバル大学に指定を受けている国際教養大学の取り組み，学生，大学院生に関する感想

今回の活動で，英語の重要さ，英語が使えることによっていろんな国の人とコミュニケーションをとれる楽しさが分かった。活動では積極性が求められ，大学の学生さんにもとにかく多く質問することが大切だと教わった。またすべて英語と言う環境で積極的に英語をつかうことが英語を学ぶうえで大切だということが分かった。私たちのグループの留学生は，日本語は複雑だが，だからこそもっと学びたいと言っていた。私はその留学生から他言語に対する関心の強さ，積極性をまなんだ。プレゼンのコツなどこれからも使うことも学んだ。この活動で学んだことを忘れずに，今後に活かしていきたい。

（参加生徒　男子）

◆フィールドワークに参加した目的と達成状況

まず，本来の参加目的としては北海道の魅力を外国人からの視点で考えてみるというものであった。そのために，北海道の経済や観光につながるいくつかの質問を考えてから国際教養大学へ行った。しかし，その質問の内容すべてを留学生に聞くことはできなかった。聞くことができなかった原因は，時間がなかったということがあげられる。しかし，聞くことができなかった分，学んだこともいくつかあるが，それは次の章で述べる。今回聞くことができなかった分は，今年の冬にオーストラリアに行く機会があるため，その際に聞こうと考えている。今後は時間がない中でも，何気ない会話の中に質問を織り交ぜられるようにして，目的を達成しようと思う。

◆フィールドワークを通じて学んだこと

今回のフィールドワークで学んだことはたくさんあるが，自分で特に大事だと思ったものは４つある。１つ目はスピーチの作り方です。今回のフィールドワークの前半グループは留学生との

コミュニケーションを中心として留学生とその方の出身国についてのスピーチをした。スピーチの原稿を作る際に，留学生との会話は必須事項であった。そこで，相手からより中身の濃い内容の話を得るためにどのようなインタビューをすればよいのかということが学べた。２つ目に学べたことは，外国人との上手なコミュニケーションの取り方です。これは，対留学生の場合なので，すべての外国人に当てはまるかはわからないが，２つ紹介させてもらう。まずは，相手がなにを言っているのか理解できているかどうかという意思表示が大切であると感じた。この理由は，話が理解されているかどうかということがわからないと，相手も不安になるからである。次に大切だと思ったことは，単語がわからなくても，恐れずに似た意味の単語を使ったりジェスチャーをするということだ。この理由は，相手も聞くことに努力してくれているので，多少おかしな単語や文法があっても理解してくれるからだ。３つ目は，相手の国の文化を否定しないということだ。これは簡単で，文化を否定するというのはその人の先祖を全員否定しているようなことで，そんな不愉快極まりない行為は絶対にしてはならないからだ。そして４つ目は，日本の文化をよく知っている必要があるということだ。この理由もいくつかあるが，もっとも重要だと思われることを紹介させてもらう。今回留学生の方と交流させてもらって気がついたのだが，自分の国についてよく知っているということだ。もしも，自分が留学をして，同じような質問をされたら答えられる自信がない。このことからわかったのだが，グローバル人材になるためには自分の国についてよく知っているということが必須条件であるということだ。つまり，僕たちは日本人として，最低限日本のことは知らなくてはならない。

◆学んだこと，経験したことを今後に活かす具体的な活動

今回，フィールドワークを行ったことでより一層グローバル人材がどんな人か明確になった。また，個人的な考えだが，今回の活動を通じて感じたグローバル人材という視点からみると，天皇陛下はとてもグローバルなお方なのではないかと思った。今回の活動を通じてグローバル人材に近づくために今後の活動の案を出したい。まずは日本のことを知るために，戦前や戦後の日本の動きを自虐的史観ではなく，本当の意味でとらえる研究活動をしたい。そして，皆がよく分かっていないように感じる「天皇」ということについても研究していきたい。この活動をすることで，日本がどのような国かがわかると思う。その次は，日本の経済問題に入っていき，高校生の最後には，アジア諸国との関係を研究していきたい。また，余裕があればだが，中国や，韓国が行っている抗日がどのようなことが原因なのか，それがだれの思惑なのかを調べたい。こうしてみると，日本の戦争について考えていて。欧米諸国や，アフリカには目が向けられていないように思えるが，３年間ではこれだけできれば妥当だと思う。日本がどんな国なのかがわかり，日本国民として自信が持てるようになってからようやく SGH の授業をやる意味が出てくると思う。

◆フィールドワークを通じて感じた文化の違いをどのように受け止めたのか

今回のフィールドワークではいくつかのグループに分かれグループワークを行った。そのときに僕のグループの担当だった留学生はイタリア人の女性だった。彼女とのグループワークを通じて感じられた文化の違いは，いくつかあるが，個人的に大きいと思える文化の違いはジェスチャーと食文化だ。まず，ジェスチャーについての考え方だが，日本にはそれほど多くのジェスチャーはないと思うが，イタリアには多くのジェスチャーがあるとわかった。そのことから，イタリア人は外交的な人や社交的な人が多いのではと思った。外交的な性格や社交性はグローバル化していく中で，自らをアピールすることは必須になると思うし，言葉では言い表せないようなこともジェスチャーには伝える力があるので，ジェスチャーが多いというのはとても良いことだと思う。次に，食文化についてだが，ピザやスパゲッティーといったイタリア料理は日本でも多くみられるが，彼女からしてみれば日本のイタリア料理は本場のものとは全然違うそうだ。たしかに

日本のイタリア料理は日本人の舌に合うように調理されているから，それは当り前である。逆に，日本料理がイタリア風にアレンジされているということもあるそうだ。例えば，イタリアには「スシバー」という店が流行っているそうだが，そこで出される「スシ」は生の魚をネタにはしないのである。このように，イタリアでは日本料理が，日本ではイタリア料理がと，それぞれの国が自分の国にあったアレンジをするということはすでに普通のことである。しかし，本来の国の料理を食べるということもその国を知るということでは大切なのではないかと思った。

◆グローバル大学に指定を受けている国際教養大学の取り組み，学生，大学院生に関する感想

国際教養大学は「English village」という取り組みをしているようで，それは若い世代に英語の魅力を教えるという意味でとても良い取り組みだと思うし，教える側の大学生，大学院生もさらに深く英語について学べるということで win-win な関係になっていてよいと思う。個人的な意見だが，グローバル化には英語を身につけているということも必須条件だと思う。つまり，この「English village」は良い取り組みだと思う。また，大学には大きな図書館があり，そこには日本語だけでなく，英語の本もあり，２４時間やっているらしい。そこで，知識をつけるというのもよいことだと思う。大学生，大学院生に対しての印象だが，とても社交的かつ外交的に感じたし，英語の能力もあるため，彼らのような人材がグローバル人材に近いのではないかと思った。自分も彼らのように英語の能力をつけ，日本のことをもっと知り，国の役に立てるグローバル人材になりたいと思った。

（２）Ｂグループ８月９日～１２日

①Ｂグループは，クリティカルシンキングを学ぶ目的で訪問した。グループ構成は，留学生・大学院生・学部生であった。プログラムは大学が用意したものを研究した。

②クリティカルシンキングとは初歩的な意味を理解するところからスタートし，批判的思考の持ち方を，多様なレッスンを通じて体験した。

③プレゼンは６グループに別れ，各グループに与えられたテーマを英語によるクリティカルシンキングの思考を加えたプレゼンの資料を作成した。

④６グループ全員がプレゼンを英語で実施した。Ａグループに比べ，生徒の表現力が優れていた。

⑤生徒参加報告（抜粋）

（参加生徒　女子）

◆フィールドワークに参加した目的と達成状況

目的：私がこのフィールドワークに参加した目的は，AIU で英語の楽しさと大切さを学ぶためだ。そして，海外から日本に留学に来ている留学生と英語でコミュニケーションを取ることで自分に自信をつけることもその一つだ。

達成出来た内容：AIU では英語の楽しさと大切さの両方をきちんと学ぶことができたと実感した。また中国から来ている留学生と英語でコミュニケーションを取ることが出来たことで自分に自信がつき，英語がより自分の中で身近なものになったと感じた。

未達成であった内容：自分のグループ以外の留学生の方々や，大学生と交流することが出来なかった。それは，自分に積極性が欠けていたからだ。

今後は，間違えることを恐れずに発言し，実践してみる。そうすれば，コミュニケーション能力や，発信力もつくはずだ。

◆フィールドワークを通じて学んだこと

日常で使う英文法を，留学生にインタビューする際に，実際に使用してみることで英語に慣れ，

英語に対しての抵抗感がなくなった。
また英単語を覚える際，単語のパーツごとに覚えるという手法を学んだ。例えば，ex～・e～・ef～で外へ，外側へという意味になる。export や eject，efficient などだ。他にも，re～で帰る，再び，元へ，後ろへなどの意味になる。Recycle や rewrite などがある。このように共通のパーツで覚えていくと覚えやすいということがわかった。

次に発音記号を教わった。普段あまり気にしていなかった発音記号だが，その発音記号が重要だと学んだ。発音記号を読めることになったことで，正しく英語を発音することができるようになり，より英語に親しむことができた。そして英語でのプレゼンテーションの仕方も学んだ。

英語でプレゼンテーションをするときは，難しい単語は使わずに，自分の言葉で表現する。例えば，それは車で，色は白と赤だ。病院に行く。病人を運ぶ。と言うと「救急車」だとわかる。このように自分にとってわからない単語を言い換えてみることで相手に伝わりやすくすることが大切だと学んだ。また，効果的なプレゼンテーションをするためには，スライドを使うことが重要だ。ただ単にすべての情報を載せるのではなく，印象づけたい部分や一度聞いただけでは記憶に残らない情報のみを記載する。そうすれば見やすくなるため，相手にとってわかりやすいスライドになる。図を使うのも効果的だと教わった。

このように相手が理解でき，自分の伝えたいことが伝わって，初めてプレゼンテーションの意味があることを学んだ。

◆学んだこと，経験したことを今後に活かす具体的な活動

グローバル人材になるには，ただ単に他国の言語が話せるだけではグローバル人材にはなれないと知った。言語を習得することはもちろんだが，同時に自分の母国である日本についてより知ることが必要だと学んだ。また，積極性と自律心が重要になることも教わった。そのことから，札幌日大には台湾学校との交流や交換留学生の受け入れなど国際的な活動を行う機会が多くあるので，それを利用して，今回の経験を生かした，北海道の文化や風土を英語でプレゼンテーションする。それが実現すれば，海外の方にも北海道についてより知ってもらえ，学校の国際化につながると考える。

また，いくつかのグループに分け，ひとつの題についてディスカッションをすると，それぞれの違った観点や視点で物事を考えることができる。そして，議論や討論をすることで，その題について深く考えるようになる。ディスカッションという機会を設けることで，それぞれが自分の意見を持って発言し，積極性や向上心，自律心が伸びると考える。日本と海外の文化や経済，人権や教育などの社会的問題の違いについてを中心に取り組む。例えば，日本の教育と海外の教育の違い。日本の教育について調べるグループと海外の教育について調べるグループに分け，両国の教育方針や教育課程，経済面についてや学校内で起こっている問題，いじめ，学級崩壊などを自分たちで調べ，研究し，発表する。各グループはどうすれば日本にとってより良い教育ができるかを考え，自分たちの意見をまとめる。そこからディスカッションを始め，各グループの意見をひとつのものにする。

このディスカッションが可能になれば，日本と海外の違いを知ることができ，自分たちの知らなっかたことが明確になる。ひとりひとりが自分の意見を持ち，発言し相手の意見を受け入れることや，受け入れてもらうことを経験することで自信を持ち，積極的に様々な活動に取り組む力がつくと考える。

◆フィールドワークを通じて感じた文化の違いをどのように受け止めたのか。

特に中国と日本の違いは特になく，唯一あがったのが食だ。日本の食は健康であるということだ。特に納豆や味噌汁は好評である。

このことから，日本は食に気を使っていることを実感させられた。また，私は中国に対してあま

りいい印象を持っていなかった。それは日本のニュースや番組で中国の悪い部分しか見ていなかったからだ。日本では中国の悪い部分を多く取り上げるため，悪い印象しかなかった。しかし，実際に中国の人と話す機会があったことで中国に対しての考えかたも変わった。文化の違いがあまりないため，親しみやすく，親切であった。

私たちの活動にも多くの手助けをしてくれ，彼女の協力でプレゼンテーションがより良いものになったと思う。この経験から私は何も知らずに偏見していたことに気づいた。日本という狭い視点から中国を見ていた。これからは，自分からの視点だけでなく相手からの視点も意識して物事を考える。そうすれば，新しい発見をすることができ，見えていなかった部分も見えるようになる。

◆グローバル大学に指定を受けている国際教養大学の取り組み，学生，大学院生に関する感想

授業は基本英語で行った。私たちにわかりやすい英語で丁寧に説明してくれ，英語に対しての抵抗感がなくなった。また日本の大学生は留学生と同じ空間で過ごしているため，自然と英語能力の向上につながると感じた。1 年間の海外留学にも取り組み，在学中に日本では決して体験できない数々のチャレンジを重ね，異なる文化や価値観に触れることで，自分自身について，また母国の日本について深く考えるようになるそうだ。そうした経験を積んだ AIU にいる学生や大学院生の方々は，上昇志向が強く，将来何がしたいのかはっきり考え，英語を楽しんでいるように思えた。また，自分の長所をしっかりと自覚し，自分に自信を持っているように見えた。また，自分自身を理解しているように思えた。そして，多様な価値観を持っているため，さまざまな観点から私たちに助言をくれた。失敗とは間違えたりつまずいたりすることでなく，そのまま起き上がらない，挽回しないことだと教わった。間違えてもいいからまず取り組むことが大切だ。このことから，私はとりあえず挑戦してみるという考えかたを持つことができた。間違えることを恐れず，前に進むことで，新しい道が開けることを学んだ。それは大学生の方々が AIU で実際に学んだり，経験したことであるのだとこのプログラムに取り組んでわかった。私たちのために，試行錯誤しながら活動を計画してくれたため，私たちも意欲的に活動することができたと実感している。

（参加生徒　女子）

◆フィールドワークに参加した目的と達成状況

フィールドワークに参加した目的は大きく下の３つである。

○実践的な英語学習～

研修中は，授業から，留学生との交流まで，英語に触れる場面がとても多かった。そのため，英語を聞き取る力，自分の考えを人に伝える力が身に付き，英語を使うことに自信を持つことができた。特に，研修最後のプレゼンテーションで，内容を相手に伝え，コミュニケーションをとりながら発表できたことは非常に良い経験となった。

○異文化理解～

留学生の方にインタビューをした限りでは，それほど大きな異文化は感じられなかった。外国との文化の違いよりも，外国人から見た日本の姿について知ることができた。

○北海道産業への興味，関心の調査～

日本人，外国人ともに北海道を訪れたことのある人は少なかった。だが，北海道の魅力である新鮮な食材やウィンタースポーツには興味をもっていた。また，私のグループの担当だった中国人の学院生に，自国での日本旅行の人気の具合と目的を聞いたところ，やはり日本旅行はとても人気が高く，目的については大半の人が買い物だと答えていた。外国人観光客が北海道で使う金額が少ないと懸念される今，中国人観光客らのまとめ買いをさらにサポートすることで改善が見込めるのではないだろうか，と考えた。

◆フィールドワークを通じて学んだこと（学問，手法，ものの考え方など）
フィールドワークを通じて学んだことは以下の６つである。
〇Japanese-English exercise～
英語で言えない日本語の単語を人に伝える際に，和英辞書を使って単語を調べるのではなく，一度簡単な日本語で説明文を作り，自分の知っている限りの単語で人に伝える練習をした。難しい単語を調べても，発音が難しい，あるいは，日常生活では使われていないなど，相手に伝わらない可能性も高い。わからない単語を簡単な単語で説明する練習をすることで，実際に人と英語で会話する際に非常に役に立ち，この後のオーストラリア，シンガポールの研修旅行においても必要となるであろう。
〇“Critical Thinking”～
物事を短絡的に見るのではなく，様々な方向から多角的に良い面，悪い面を考えるという手法を学んだ。グローバル化が進む現在において，様々な国，地域，宗教などの視点から事象を判断することができるこの考え方は社会に出てからますます重要である。
〇発音記号～
スクリーンに映し出された発音記号を全員で読みながら，全ての発音記号の説明を受け，発音記号をマスターした。日頃の授業ではなかなか着目されない発音記号であるが，実際に英語でコミュニケーションをとる際には，正しい発音をしなければ相手には伝わらない。また，正しい発音を心がけると，相手の英語もわかりやすくなり，リスニングでの点数も上がるため，発音記号はとても有用性のある分野である。
〇部品で覚える英単語～
英単語が英語の最小単位ではなく，単語を構成する６０程の部品が英語の最小単位であり，すべての単語がこの部品の組み合わせによってできていることを学んだ。部品ごとの意味を覚えることで，見たことのない単語であっても，大まかな意味を予想することができるようになる。
〇プレゼンテーション～
観客を惹きつけるプレゼンテーションを行うために大事なことを，学生の良い例，悪い例を見て体感した。観客の方を見て，表情豊かに，動きも交えることで，リラックスして聞いてもらうこと，また，聞き手に合わせた英語，単語を使い，例や効果的なパワーポイントを使いながら，わかりやすく発表することの重要性を感じた。また，最終日には，この研修で習ったことをすべて活かしたプレゼンテーションを班ごとに行った。
〇積極性～
学生や先生から全体への問いかけの際，あるいは，グループで会議している際，なかなか反応を示さない私たちに，学生，先生方は積極的になれと常に声をかけてくれた。そして，内田先生からは，日大の生徒はプライドが高く，人の目や間違いを気にして積極的に発言，行動できていないと指摘された。的確な指摘にとても動揺し，薄々感じていた自分たちの欠点を実感した。積極的に自分の意思，考えをぶつけ合わなければ，それぞれの個性や良い点を引き出し，より良い集団を作っていくことはできない。今後私たちの大きな課題となるだろう。
学んだこと，経験したことを今後に活かす具体的な活動（研究も活動とする）
・新聞やニュースなどで見た時事問題についても，報道されたものをそのまま受け止めるのではなく，様々な視点から問題を考える。自分の意見をまとめた後には，両親や友人などと意見を交換し，様々な考え方を知る。（時事問題に詳しくなるとともにCritical thinkingも応用できる。）
・英単語を覚える際には，構成する部品や発音記号にも注意して覚えていく。
・日々のＳＧＨの授業でプレゼンテーションを行う機会を無理のない程度に増やし，日本語だけで

はなく英語で行う機会も作る。（発表後には研修の際のように自分たち全員で評価しあうことでより良いものを作る。）

・週に１日，日本語禁止，英語で生活する English Day を作る。（言語を上達させるには，単語，文の構造，発音，リスニング全てが必要になる会話をすることが重要である。）

◆フィールドワークを通じて感じた文化（食・生活・地域の習慣など）の違いをどのように受け止めたのか。

私たち後半グループでは，プレゼンテーションの題材が留学生に関するものではなかったため，相手国との文化の違いを深く考える場面は少なかった。他国の日本との違いよりも，他国から見た日本の姿に気づかされた。寿司などの日本食や，日本特有の祭りや温泉，四季のある自然豊かな風土などの人気は非常に高かった。特にある留学生の話では，日本に来て日本食の生活を送ったことで，２か月間で８㎏痩せたと言う。日本食の健康さに改めて驚かされた。また，着物や建物などの伝統文化を大切にする日本人の考え方や，優しい人柄，エスカレーターで端に立つなどの人への気配りが感じられる習慣が好きだと答えた学生もいた。日本の姿を改めて見つめることで，別の機会に外国人と会った際に日本の魅力をより伝えられ，また，社会に出た際に日本の強みを活かした戦略を考える手助けになると感じた。

◆グローバル大学に指定を受けている国際教養大学の取り組み，学生，大学院生に関する感想

今回サポートしてくれた日本人学生，留学生は全員がフレンドリーで，常に笑顔で見守り，時に盛り上げてくれ，とても楽しく，居心地の良い研修となった。ただ英語や勉強ができるだけではなく，どこに行っても通用し受け入れられるように，内面の部分でも指導を受けているのだろうと感じ，大きな刺激を受けた。学生内の雰囲気もとてもよく，多くの同級生が秋田国際教養大学に入学したいと言っていた。予想外だったのは，秋田国際教養大学の学生の将来の夢が英語の教師や，まだ決めていないなど，グローバルに活躍したいと答えた生徒がいなかったことだ。この研修に関わってくれた学生だけでなく，パンフレットの卒業後の進路の欄を見ても，国内の一般企業が多く驚いた。秋田国際教養大学の卒業生が各会社でどのような仕事を行い，大学での生活を活かしているのかを知りたいと思った。

【シンガポール研修】

１．実施目的

本研修はシンガポールでのフィールドワークを通して，多文化社会において，「自我の確立・多様性の受容・普遍性への気づき」の IB 精神のもと，世界規模の視点にたって，グローバル化社会の課題を自らの問題意識から発見し，多角的に検証を行い，責任ある地球市民として多様性ある行動と発信を行える人材育成のためのフィールドワークを実施するものである。

２．研修先及び研修内容

日本との違いを理解する目的で，現地企業・大学・高校を訪問し，文化や暮らしの相違を体験する。

（１）現地企業訪問

①Sky Greens Vertical Farm　都市型垂直農園スカイグリーン（言語　英語）

わずか 715 ㎢の国土に 540 万人もの人々が暮らすシンガポール。多くの国民の住まいを確保するために，シンガポールは上に伸びる対策，つまり高層の共同住宅建築を増やすことを余儀なくされている。そして，今，この垂直モデルは都市型農業にまで応用されている。シンガポールの食料自給率はわずか 7%。生鮮野菜やフルーツのほとんどをマレーシア，中国などの外国からの輸入に頼っている。シンガポール政府は，自給率 10%を目標に掲げ，2011 年には民間の Sky Green 社とシ

ンガポール農食品獣医庁（AVA）との提携にて都市型垂直農園スカイグリーンを開発した。化学肥料/薬品に頼らない有機用土等を利用，そして巡回型水車システムと LED ライトの利用による省エネと環境保全を徹底し，3-9mのアルミ製のタワーが並ぶ 3.6 haのスカイグリーンでは，従来の土の農地よりも 10 倍もの収穫力を持つと言われてる。実際ここで育てられた，ナイバイ（奶白）などの地元で親しみのある野菜は，シンガポール最大の食品小売業者 NTUC フェアプライス生協に供給されている。

②NEWater Visitor Centre　ニューウォータービジターセンター（言語　英語）

シンガポールのリサイクルウォーター（ニューウォーター）について学ぶ施設を見学。学生だけでなく，自治体，企業からの注目も集める施設です。

ニューウォーターとは，下水処理をしたお水，いわゆるリサイクルウォーターのことです。このリサイクルウォーターをシンガポールの政府機関が「ニューウォーター」としてブランディングした施設の見学。

シンガポールは，国土も狭く，資源もない国で，水も隣国マレーシアから購入している。シンガポールでの水の供給は，4 つの供給源である。

・マレーシアからの輸入水／Imported Water
・貯水池に溜まった雨水／Local Catchments
・ニューウォーター／New Water
・海水からの淡水化／Desalinated Water

過去の歴史や政治的背景から，シンガポールでは水資源の問題は重要視され，国策として早くからその課題に取り組み，現在では工業用水も含め 100%近く自活できるようになる歴史を持っていた。

（２）教育機関訪問（大学）

①シンガポール国立大学（言語　英語）

英国教育専門誌「タイムズ・ハイヤー・エデュケーション（ＴＨＥ）」発表の世界大学ランキング２６位（アジアでは１位）を訪問。学部生とグループによる大学紹介，研究活動の体験を通じて，世界の大学を実経験することで，海外大学への進学意識の高揚を図った。また，昼食は案内をしていただく学生と共にランチを１時間程度ともにしてシンガポール国立大学の調査を行う。

②Ｙａｌｅ－Ｎｕｓ　Ｃｏｌｌｅｇｅ（言語　英語）

300 年の歴史を誇る米国のイェール大学と NUS による，シンガポール初のリベラルアーツカレッジとして 2013 年に開学。イェール大学と同様に全寮制で， 2 年間の教養課程の後， 14 の専攻から選んだ専門分野に進学。 現在の一期生は 25 カ国から 150 人が学んでおり，最終的には大学全体で 1,000 人の学生を迎える予定。外国籍学生率は 40%に維持され，世界的にも「最高水準の国際性」を持つ大学を訪問し，2 グループに分かれ模擬国連の体験を行った。

（３）教育機関訪問（高校）

ビクトリア　ジュニア　カレッジ（言語　英語）

シンガポールでは有数の国立ドクトリア・ジュニア・カレッジに訪問して交流活動当日のプログラムは，

①学校紹介
②「日本から見たシンガポールの観光について」アクティブティ・ディベート
③生徒同志によるキャンパスツアー
④交流ランチ

３．研修団

引率　副校長・教員１名　　参加者生徒　男子１５名・女子１９名

４．研修行程

平成２８年　３月２１日（月）～３月２５日（金）　４泊５日

月日(曜)	地　　名	現地時刻	実施内容
3/21(月) ホテル泊	新千歳空港集合 新千歳空港発 成田空港着 成田空港発 シンガポール着 ホテル着	１２：３０ １４：００ １５：５０ １６：５０ ２３：２５ （専用バス） ０：３０頃	移動日 シンガポール到着後宿泊ホテルへ
3/22(火) ホテル泊	ホテル発	現地企業研修 ３社 （専用バス）	JTB シンガポール支店→ニューウォーター研修→ＪＴＢシンガポール支店→昼食→スカイグリーン研修→夕食→ホテル研修
3/23(水) ホテル泊	ホテル発	現地大学研修 ２大学 （専用バス）	（午前） シンガポール国立大学キャンパス研修。シンガポール国立大学生を囲んでの昼食会
			（午後） Ｙａｌｅ－Ｎｕｓ　Ｃｏｌｌｅｇｅ研修 模擬国連体験 （テーマ） 森林環境破壊 →夕食→ホテル研修
3/24(木) 機内泊	ホテル発	現地高校研修 （専用バス）	（午前） ビクトリア　ジュニア　カレッジ高校交流。日本とシンガポールの観光についてプレゼンと意見交換及び　合同昼食
		日本企業訪問 観光施設研修 （専用バス）	キッコーマン現地工場視察。職員によるグローバル教育 マリーナベイサンズ，ニュートンサーカス等の観光施設研修
	シンガポール発	２２：３５	
3/25(金)	羽田空港着 羽田空港発 新千歳空港着 解散	６：１５ ８：００ ９：３０ １０：００	

５．研修報告書

（1）Sky Greens Vertical Farm　都市型垂直農園スカイグリーン（言語　英語）

この授業では，サイエンスセンター教室で，スカイグリーンのしくみを学んだ後，実際の都市型垂直農園スカイグリーンを訪問した。8-16 時間かけて一周する野菜の棚や，30 日かけ

て育った野菜の収穫から出荷の様子を見学し，北海道での利用可能かを検討した。

非常に狭い国土であるシンガポールでは，農作物の多くが輸入に頼っており，効率的に農産物の収穫ができないかを研究して作られたビル型農園を見学した。予め，サイエンスセンターで害虫処理，生育について解説を受けたことで，農園の環境がいかに重要かを痛感していた。北海道のように広い土地で農産業を営む場合と異なり，ビル型のメリット・デメリットに興味を持ち見学を行った。現在は，一種類の農産物を栽培している。日本の小松菜のような野菜であった。主に中華料理に使われていた。

【研修風景】

都市型垂直農園スカイグリー

（担当者からの説明）

都市型垂直農園スカイグリーン

（ビル型農園の見学）

サイエンスセンター

（ビル型農園害虫対策事前研究）

（２）NEWater Visitor Centre　ニューウォータービジターセンター（言語　英語）

シンガポールにおけるニューウォーターの技術は世界的評価も高く，各国から関心も集まっているようで施設の見学は，最初に水に関するビデオ上映があり，その後，水に関するアトラクションやニューウォーターの成り立ちについての展示説明（英語）を館内スタッフより説明を受けた。水の豊かな北海道の食文化との異なり（豊富な水資源の活用など）を調査研究した。

山岳地帯や森林など水確保が難しい国における，上下水道の水処理施設を見学し，北海道の水源事情との違いを理解したようだ。特に，ここで処理された水は，飲料水としても利用可能だが，現在は工業用水として利用されていることに矛盾を感じる生徒から，質問が行われた。水源の重要性を痛感していた。

【研修風景】

ニューウォータービジターセンター

（担当者からの説明）

ニューウォータービジターセンター

（担当者からの説明）

ニューウォータービジターセンター

（３）シンガポール国立大学（言語　英語）

英国教育専門誌「タイムズ・ハイヤー・エデュケーション（ＴＨＥ）」発表の世界大学ランキン

グ２６位（アジアでは１位）を訪問。学部生とグループによる大学紹介，研究活動の体験を通じて，世界の大学を実経験することで，海外大学への進学意識の高揚を図った。また，昼食は案内をしていただく学生と共にランチを１時間程度ともにしてシンガポール国立大学の調査を行った。

シンガポール国立大学の学生によるグループ見学を実施した。どのような目標でシンガポール国立大学に入学したのか，将来の構想など学生に質問しながら交流をしていた。学生が非常に勤勉であり，日本に興味を持っていることに関心を示していた。

キャンパス内には，高層の学生寮が数棟完備されており，教育環境は大変整備されていた。

学生の多くは，中国国籍の方のようであったが，他民族の学生で構成されていた。

【研修風景】

シンガポール国立大学

（学生との交流）

シンガポール国立大学

（キャンパス）

シンガポール国立大学　高層ビル

（学生寮）

（４）Ｙａｌｅ－Ｎｕｓ　Ｃｏｌｌｅｇｅ（言語　英語）

シンガポール初のリベラルアーツカレッジとして 2013 年に開学したＹａｌｅ－Ｎｕｓ　Ｃｏｌｌｅｇｅでは，模擬国連を学生と一緒に実施。テーマは「環境問題」。英語での交渉毎に慣れず苦戦していたが，時間の経過とともに，コミュニケーションがとれるようになった。観光地での環境問題などを議題として活動した。

【研修風景】

模擬国連

（国毎の折衝風景）

模擬国連

（国連体験）

模擬国連　国連ルール説明

（学生による説明）

（５）ビクトリア　ジュニア　カレッジ（言語　英語）

①ビクトリア　ジュニア　カレッジの生徒が準備した歓迎セレモニーから交流が始まり，活発な活動となった。本校生徒が準備した「日本文化の紹介」「シンガポールの高校生を北海道へ誘致」する企画書２点をプレゼン。雪に対する意見交換，自然大地，国土の大きさなどが話題となり，交流を行った。

日本の行事・文化をプレゼン後，シンガポールの文化と相違点について，現地のゲーム，学習などについて話し合った。

【ビクトリア　ジュニア　カレッジ　交流・研修風景】

<table>
<tr><td> </td><td>
</td><td> </td></tr>
<tr><td>（生徒発表）</td><td>（生徒発表）</td><td>（ランチ交流）</td></tr>
<tr><td> </td><td> </td><td> </td></tr>
<tr><td>（談笑）</td><td>（シンガポールゲーム）</td><td>（両校生徒）</td></tr>
</table>

②昼食は，現地の屋台へ両校生徒が訪問し，東南アジアの食文化である屋台体験（他民族料理）をした。生徒は，他民族が暮らす国の食文化多様性を一様に驚いていた。生徒が飲食した代表的なシンガポールで食されている料理。

<table>
<tr><td> </td><td> </td><td> </td></tr>
<tr><td>チキンライス
シンガポールのローカルフードの中で，最も有名なものの</td><td>フィッシュヘッドカレー
シンガポールのインド料理。スパイスを使ったカレーに魚の頭が入る</td><td>サテー
串に刺した肉を焼き，ピーナッツソースをつけて食べる</td></tr>
</table>

【本校生徒による　日本文化紹介　英語プレゼンテーション資料】

発表の概略抜粋

１月の説明

□和文

１．１月に行われる日本行事についてお話します。
１月は正月が有名なので，今回は正月をピックアップしたいと思います。
この行事は，シンガポールでは，旧正月に相当するものだと思います。
日本では基本的に１月１日から３日のことを指し，文化的には旧年が無事に終わった事と新年を祝う行事です。

２．左上の写真をご覧ください。正月の食として有名な物は何と言っても，おせち料理とお雑煮です。
おせち料理とは，正月に食べるお祝いの料理です。『重箱』と言う弁当箱のようなものに料理を詰めるのが伝統です。
『重箱』の中身は地方や家庭ごとに様々です。
お雑煮は豆が材料の『みそ』や，『しょうゆ』という調味料などで味をつけたスープに『もち』をいれた料理です。
これも地方や家庭ごとによって味付けや具材が違います。

３．右上の写真をご覧ください。これはお年玉と言い，日本では年長者が年少者に対して渡す，おこずかいのようなものです。
日本では『ポチ袋』という袋に入れます。
これは，子供のほとんどが待ち望んでいる，もしかしたらお正月で一番楽しみにしているイベントかもしれませんね。
隣にあるのが『年賀状』です。これは新年のあいさつ状のようなものです。

４．左下の写真をご覧ください。
日本人はお正月に初詣へ神社へ行き一年の感謝をささげたり，新年の無事を祈ります。
おみくじはその年の運勢を占うものです。
種類としては一般的に，良いものから順に『大吉』『吉』『中吉』『小吉』『末吉』『凶』などがあります。

５．右下の写真をご覧ください。正月の風物詩をご紹介します。
日本では年が明けると，毛筆で絵や字を書く風習があります。一般的には新年の抱負を書きます。
これを『書初め』と言います。多くの小中学校では冬休みの課題になります。
『初日の出』はその年の初めに初めて見る日の出です。『ご来光』とも言います。
『鏡餅』はご存知ですか？見ての通りですが，もちを円形状にしたものを二つ重ねて，みかんを乗せたものです。これは神仏へのお供え物として正月に供えるのが伝統です。

□English

１．I’ll explain about the Japanese event which takes part in January.
Japanese New Year is popular in January, so I want to talk about it.
I think this is event equivalent to Lunar New Year in Singapore.
Basically, Japanese New Year is from January 1st　to　3rd　and culturally,
we will celebrate that the last year had ended peacefully and hope the new year will be a better year.

２．Please look at the top left top picture.

After all is said and done, the most famous New Years dish is “Osechi” and “Ozouni”.

We eat “Osechi” to celebrate the New Years. Filling ”Osechi” into “Jyuubako”(It’s like a lunch box.) is a tradition.

It’s different by the region or household for what we fill the “Jyuubako with”.

“Ozouni” is a dish with“Rice cake” and soup that is flavored by“Soybean paste” or“Soy sauce” in it.

Its ingredients or tastes are also different by the region or household.

３． Please look at the top right picture. The left one is “Otoshidama” and the other one is “Nenngajyou”.

“Otoshidama” is a kind of pocket money and it is given to youger people by their elders.

As you can see, we put in the pocket money into a small envelope called “pochi bukuro”.

Most Japanese children are looking forward to this event. Maybe this event is the most exciting one for them!!

“Nenngajyou” is kind of like a greeting card. And most people send it every year.

４．Please look at the bottom left picture.

Japanese people visit the shirine during the New Years and appreciate the last year and hope the new year will be well.

That’s “Hatsumoude” and We tell the New Years fortunes by “Omikuji”. There are 6 types of Omikuji

From best to worst, “daikichi” ”Kichi” ”Tyuukichi” ”Syoukichi” ”Suekichi”and the worst one is ”Kyou”.

５．Please look at the last picture.

This is a common Japanese feature in “Syogatu”.

In Japan, we have a custom to do calligraphy in the New Years.

Generally, we express our own hope with calligraphy.

In Japan, we call this event “Kakizome” and most Japanese elementary school or high school students work on this as a winter holiday homework.

“Hatsuhinode” which is the picture next to calligraphy, is the first sun rise in the year and we also say, “Goraikou”.

Do you know what “kagammimochi” is?

As you can see, two oval shaped rice cakes are piled up and on the top, we put an orange.

Japanese offer this in the New Years.

２月の説明

□和文

シンガポールには中国人の文化に親しい人が多いので，二月は旧正月というイメージがあるかもしれませんが，日本の二月ではもうお正月をとっくに過ぎていて，仕事や学校には当たり前のよう行っています。

１.イベントとしては２月には節分と，バレンタインデーがあります。

節分は日本の伝統行事です。自分の中にいる怠けや怒りの心を，鬼に「鬼はーそと，福はーうち」と言って豆を投げつけることで，追い払います。

また，自分の年の数だけ豆を食べたり，その年の運がめぐってきやすい方角をむいて恵方巻を食べます。食べているときにしゃべってしまうと福が逃げて行ってしまうとされています。
もっと本格的な節分ではイワシの頭を飾って，鬼を追い払うところもあります。

２．バレンタインデー

シンガポールのバレンタインデーでは男の人が女の人をデートに誘ったり，ディナーに誘ったりするそうですが，日本では違います。むしろ女の人が男の人にプレゼントをします。日本では女の子が男の子にチョコを渡すのがバレンタインデーの習わしです。その後，３月１４日にあるホワイトデーに男の子は女の子にお返しをします。最近では友達同士でチョコレートを渡しあう友チョコや，好きではないけれど，お世話になった人に渡す義理チョコなどもあります。

□English

In Singapore, Chinese culture is familiar to many people, so your image of February will be the lunar New Year. But in Japan, going to school or work are natural things because Japanese don't have the culture of the lunar New Year.

１．However, the events of February in Japan are *setsubun* and St.Valentine's day. *Setsubun* is Japanese traditional event.

We throw beans at *oni*, a kind of Japanese monster, with saying "*Oni wa soto, fuku wa uti*" which means "*Oni* go away, luck will come" .
In order to rid of a bad mind, such as being lazy or angry.
we eat beans, or *ehoumaki* which is also the same as norimaki. The number of beans we eat is same as your age and we look in a specific direction and no speaking when eating *ehoumaki*. If we speak when eating *ehoumaki*, that year's luck will run away from that person. Specific direction changes every year.

Some people display a sardine's head because *oni* dislike sardines.
In Valentine‘s day in Singapore, men invite women to a date or dinner. But in Japan, women present chocolate for men. This is popular in Japan. Many chocolate shops sell a lot of colorful and cute chocolate. The man who is given chocolate, has to return a gift. Nowadays, many girls give to their friends which is called "*tomo-choko*", and give to their boss witch is called "*giri-choko*" .

８月の説明

□和文

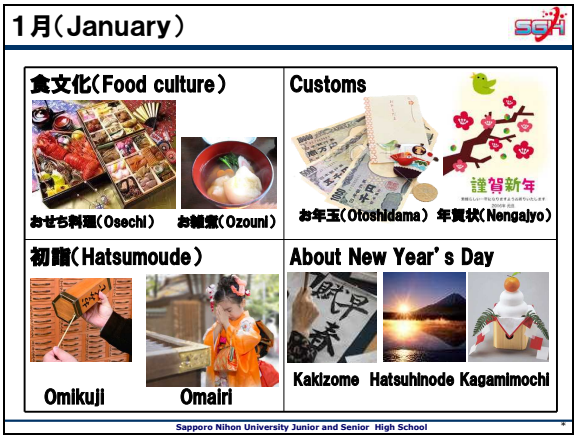
・日本の８月について説明します。８月は日本では夏休みです。
・シンガポールは一年中熱いですよね？日本には四季があるので暑いのは７・８月の２か月間です。
・８月は特にお祭りが多いです。特に，青森ねぶた祭，灯篭祭り，仙台七夕，よさこい祭り，などたくさんのお祭りがあります。
・日本の８月には私たちにとって知っておかなければないことがあります。それは原子爆弾です。１９４５年の８月に広島と長崎に原子爆弾が落とされました。それによって，多くの日本人が亡くなりました。原子爆弾が落とされた日に広島と長崎ではなくなった方に対して黙祷をささげます。

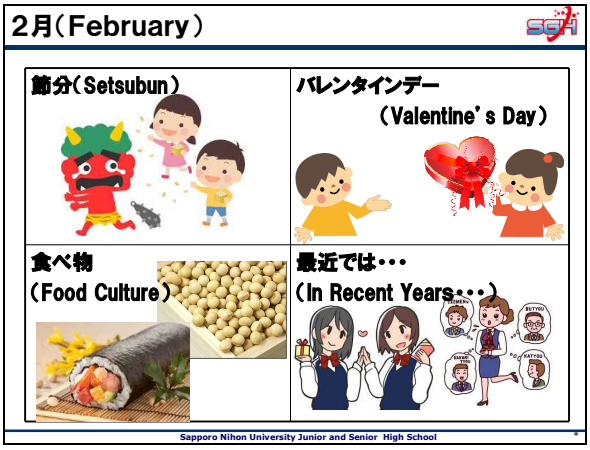
月毎の伝統文化や行事を，グループで発表した。

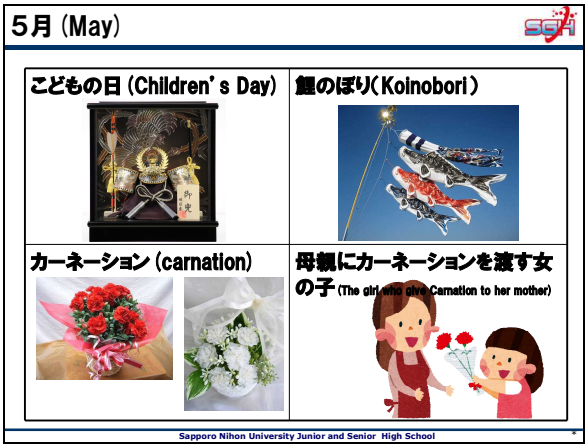
□English

1. I’ll talk about August in Japan. We have summer vacation in August.
2. It’s very hot in Singapore all day, isn’t it? There are four seasons in Japan and the hottest month is July and August.
3. We have a lot of festivals in August. Nebuta festival, Kantou festival, Tanabata festival and Yosakoi festival are famous.
4. We have other important things too. It is the day when the Atom bomb was dropped.
5. The Atom bomb was dropped on Hiroshima and Nagasaki August in 1945 and many people died. In Hiroshima and Nagasaki,people give a moment of silence.

以下，発表に用いたスライド資料。







6月 (June)

よさこい (YOSAKOI FESTIVAL)

(YOSAKOI FESTIVAL)

梅雨 (Rainy season)

あじさい (Hydrangea)

7月 (July)

海開き (Opening sea)

海 (Sea)

七夕 (Tanabata)

土用の丑の日 (Midsummer Day)

8月 (August)

四季 (4 seasons)

お祭り (Festival)

原爆ドーム (Atomic bomb dome)

原爆の子 (statue in Nagasaki)

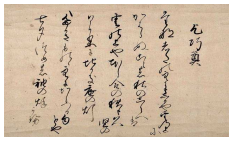
9月 (September)

お月見 (full moon)

食文化 (Food culture)

ススキ (susuki)

遊び事 (Poem)



10月 (October)

海外のハロウィン

Other country's Halloween

日本のハロウィン

Japanese Halloween

11月 (November)

ポッキーの日 (Pocky's

七五三 (Shichigosan)

酉の市(Torinoichi)

紅葉狩り(Autumn leave

12月 (December)

飾りつけ(Christmas decorating)

食文化(Christmas food) culture

プレゼント(Christmas gift)

大晦日(New Year's Eve)

【本校生徒による　北海道研修旅行誘致　プレゼンテーション資料】

発表の要旨

□日本語文

旅行計画のコンセプト「Discover the Value of Hokkaido～シンガポールの高校生に伝えたい北海道観光三つの価値」について

・気候～冷涼な気候と良質な雪

・食と農業～広大な土地を利用した盛んな農業と美味しい食べ物

・おもてなしと日本文化～日本ならではの文化や慣習，レベルの高いおもてなし

□English

Our concept for this trip “Experience Three Values in Hokkaido”

1.Climate: cool weather and high quality snow

2.Food & Agriculture: agriculture using the huge land and food using fresh food

3.Hospitality & Culture: Japanese hospitality spirit and the culture particular to Japan

発表の概略抜粋

1. Climate

□日本語

ただ楽しんでもらうだけではダメ！雪に関する課題と有効利用の仕方も伝えねば！

・除雪作業～除雪の様子を間近で見学。除雪の大変さ，費用な高さを伝える。

・雪氷冷熱を利用した食品貯蔵庫～北海道が見出した，雪の新たな有効利用方法を伝える。

□English

It’s not only to play! We must study!

1.snow plough that removes snow: see removing snow, know about difficulties of removing snow and high costs to remove snow

2.refrigerated room using snow: introduce a new way to use snow

2. Food & Agriculture

□日本語

「食と農業」を体験するための研修先

・よつ葉乳業十勝主管工場～DVD やパネル，製造ライン見学を通じて酪農について知ってもらう。

・酪農体験～実際に動物と触れ合い，牛乳を搾り，アイスやバターをつくることで，酪農を身近に体験する。

・ワカサギ釣り体験～都市部に近い場所でも魚が釣れるということから，北海道の自然の豊かさを感じてもらう。

□English

Destinations to experience “food & agriculture”

1.Yotsuba Dairy Factory: know about dairy farming through DVDs, panels, looking at the production line of milk and cheese.

2.Fujita Farm: know about the life of cows, how to raise them and the progress of producing milk, touch animals, make ice cream and butter made from fresh milk.

3.smelt fishing in Barato river: fish smelts, fry and eat them

3. Hospitality & Culture

□日本語

「おもてなしと日本文化」を体験するための研修先

・日大での文化交流～学校体験，茶道・書道・柔道・剣道などの部活体験，昼食を一緒にとって文化交流

□English

Destinations to experience “hospitality & culture”

1.Our school: school tour, experience club activities such as tea ceremony, calligraphy, judo and kendo,and have lunch with us and know more about each other

□日本語

「おもてなしと日本文化」を体験するための研修先

・ルスツリゾートでの花火～シンガポールではあまりなじみのない花火を体験

・小樽でのガラス・オルゴール作り～外国人客が多く訪れる小樽で体験をすることでおもてなしを学ぶ。

・温泉～日本人の憩いの場，温泉を体験

□English

Destinations to experience “hospitality & culture”

2.fireworks:

3.making glass and music box:

4.hot springs:

Travel Schedule

□English

The whole schedule of our plan

Points:

1. Held in winter
2. Have some knowledge through our presentation in our school
3. Fix a hard schedule in the first half of the trip
4. We will go with you as a guide

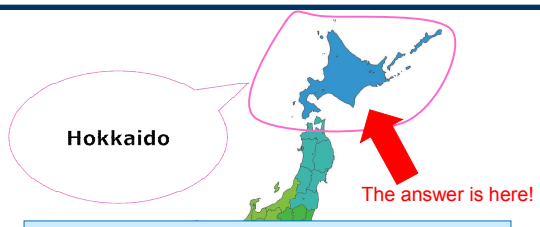
以下，説明で使用したスライド資料

Travel Plan in Hokkaido
北海道旅行計画案
for Students in Singapore

Ryouto Kai, Akane Sasaki, Kanna Matsuda,
Yurino Sasada, Yushi Hashimoto, Masaki Sato,
Kaoru Morita, Yu Ibata, Atsutaka Horiuchi,
Takeru Sato, Takehito Nakata, Miori Ebata,

SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

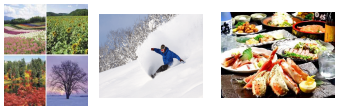
Where is Hokkaido?



Our plan concept:
"Experience Three Values in Hokkaido to Tell to Singapore Students"

Three Values in Hokkaido

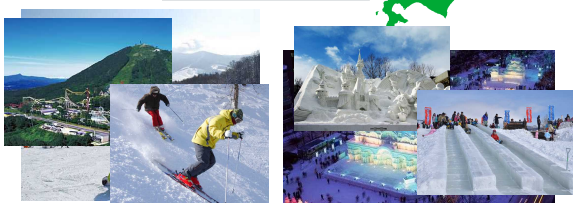
1. Climate
2. Food & Agriculture
3. Hospitality & Culture



Not only enjoy but also learn!

1. Climate

Here is Sapporo, the center of Hokkaido



Skiing & Snowboarding
In Rusutu Resort

Sapporo Snow Festival
In Odori Park

It's not only to play! We must study!!

1. Climate

~Problems made by snow~

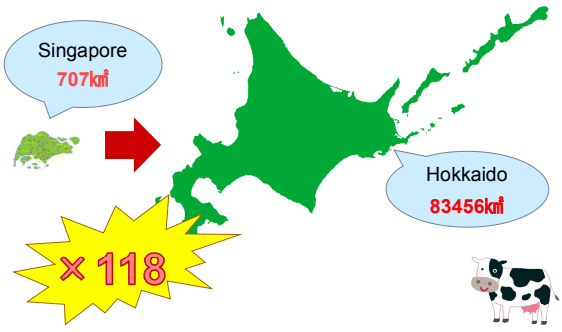
Snow plough
that Removes snow

~Good ways to use snow~

Refrigerated room using snow
to stuff food

2. Food & Agriculture

Q. How many times is Hokkaido bigger than Singapore?



2. Food & Agriculture

Yotsuba Dairy Factory

Dairy Farming Experience
In Fujita Farm

←These are smelts, very small fish.

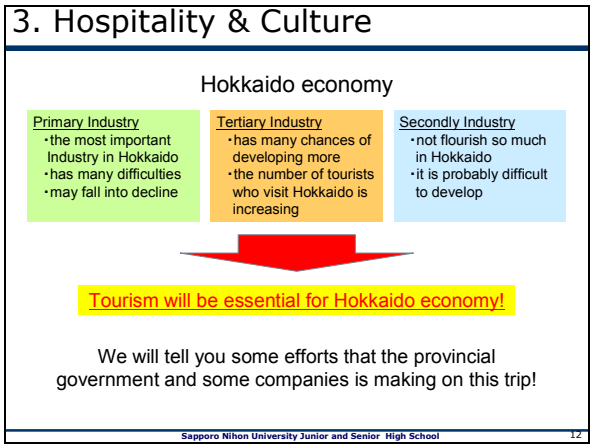
Smelt Fishing

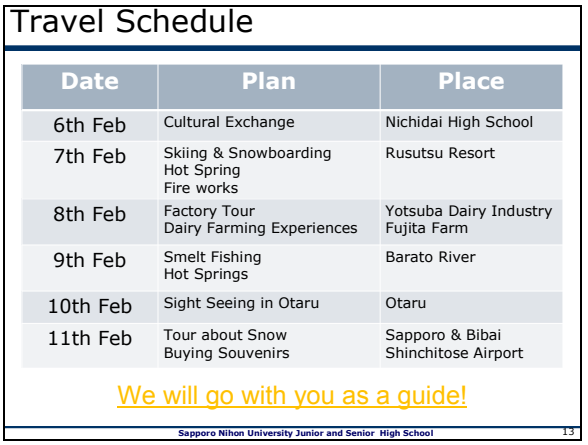
2. Food & Agriculture

problems that Hokkaido face now
- the lack of successors in farm households
- aging farmer population

food and nutritional education

"Hokkaido Brand"





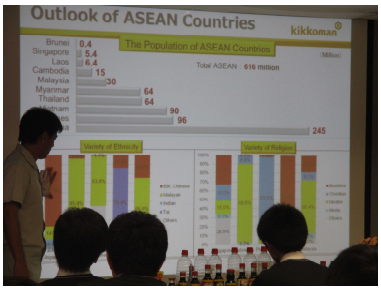
（6）キッコーマン　シンガポール支店

キッコーマン　シンガポール工場を視察。何故，シンガポールに工場を設置したのか，また，この工場の役割はどのようなことかの解説を受けた。ここでは，ヨーロッパ，アジア，オーストラリア，アメリカに商品を輸出していた。醤油の味も，地域ごとに異なっている説明を受けた。そこには，地域・国々により食文化の違いや材料の習慣などから最も適された商品を製造していることを理解した。

この工場では，日本人４名とシンガポール採用の６０数名の従業員で構成されていた。現地では少しでも給料の良い企業に流れる傾向があり，人事手法が日本と異なることの説明があった。

シンガポールは，電力・水・治安などのインフラが安定していることから，海外進出の決めてとなった説明がなされた。

【キッコーマン　シンガポール支店訪問】



キッコーマン　シンガポール工場

（シンガポール工場の役割説明）

キッコーマン　シンガポール工場

（地域に製造された醤油の味検収）

キッコーマン　シンガポール工場

（シンガポール工場進出説明）

（７）総括

ア）多民族国家シンガポールの公用語は英語，マンダリン（北京語），マレー語，タミル語の４言語であった。ショップやレストラン，ホテルなどでは一般的に英語がよく使われていたが，シンガポールの英語は，「シングリッシュ」と呼ばれるほど，独特の言い回しやアクセント，発音，スピードなどで生徒が聞き取りにくい体験をしました。発音の特徴，文法の特徴（名詞の複数形を作らない）・（動詞の語尾変化が少ない）・（be 動詞を省略する）・（反復現象）などがあり，聞き取りにくい英語であった。慣れるのに時間を要した。

イ）食文化の違いに戸惑う生徒も多かった。特に，味付けやタイ米に慣れない生徒もいた。また，北海道と異なり気候の影響も戸惑いがあった。（氷点下の気候から３０度近い気候と湿度の国での対応できない生徒が多く発生した）

ウ）アジアでは有数のシンガポール国立大学の学生との交流は，世界のトップクラスの研究に非常に興味を示す生徒が多く見られた。

エ）高校交流ではビクトリア　ジュニア　カレッジの生徒と両国の歴史，観光，教育について積極的に交流を交わすことができた。非常に礼法ができている生徒達であった。また，シンガポール国立大学で日本語を学んでいる学生も参加し，高大連携の交流であった。

オ）シンガポールは国が管理・運営する国家であった。公共交通機関（バス・地下鉄・タクシーの６割）は国が運営しており，住居も国が高層マンションを建築し，販売するものであった。オフィス街では７０㎡前後のマンションが１億５千万円（中古）で販売され，新築の住宅地では同規模で２億円前後の販売値であった。東京の一等地に近い値段であった。

カ）マレーシアと国境が接していることから，マレーシアで暮らす方が，国境を越えてシンガポールに働きにきていたことは，島国の日本との大きな相違点であることを実感していた。

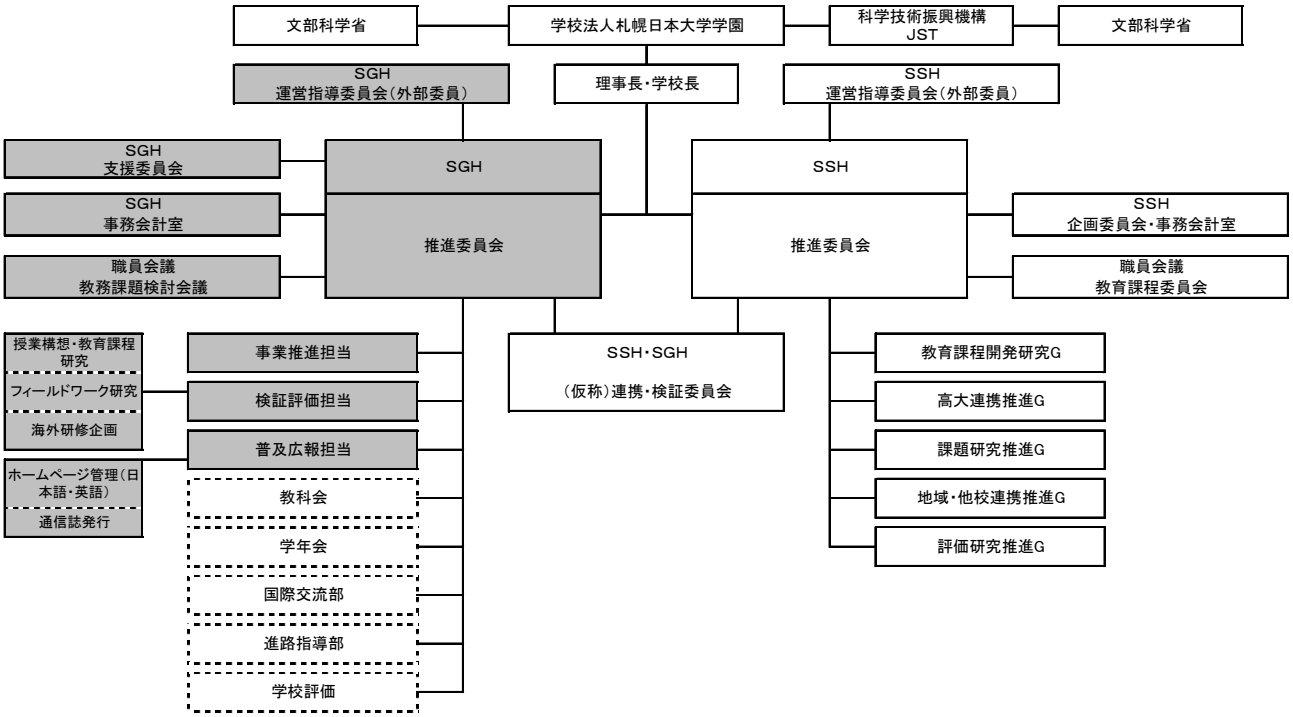
（巻　末）

□平成２７年度第１学年３ヵ年教育課程

教科	科目	単位数	高1		高2				高3			
					文系		理系		文系		理系	
国語	国語総合	4	◎	3								
	現代文B	4			◎	3	◎	3				
	古典B	4	◎	2	◎	2	◎	2				
	国語演習								◎	5	◎	3
地歴	世界史B	4			○							
	世界史A	2	◎	2								
	世界史演習								○			
	日本史B	4			○	4						
	日本史A	2	○	2								
	日本史演習								○	8		
	地理B	4			○							
	地理A	2	○									
	地理演習								○		○	4
公民	倫理	2										
	政経	2										
	現代社会	2			◎	2	◎	2				
	公民演習								○		○	
数学	数学Ⅰ	3	◎	3								
	数学Ⅱ	4			◎	3	◎	4				
	数学Ⅲ	5									◎	7
	数学A	2	◎	3								
	数学B	2			◎	2	◎	2				
	数学演習								◎	5		
理科	物理基礎	2	○	2								
	物理	4					○	3				
	物理演習										○	4
	化学基礎	2					◎	3	◎	2		
	化学	4										
	化学演習										◎	4
	生物基礎	2	○									
	生物	4					○					
	生物演習										○	
	科学と人間生活	2	◎	2								
	理科特講A				○							
	理科特講B				○	3						
	理科演習A								○	2		
	理科演習B								○			
保体	体育	7～8	◎	2	◎	2	◎	2	◎	3	◎	3
	保健	2	◎	1	◎	1	◎	1				
芸術	音楽Ⅰ	2	○	1	○	1	○	1				
	美術Ⅰ	2	○		○		○					
英語	コミュ英語Ⅰ	3	◎	4								
	コミュ英語Ⅱ	4			◎	4	◎	4				
	英語表現Ⅰ	2	◎	2								
	英語表現Ⅱ	4			◎	2	◎	2	◎	2	◎	2
	英語演習								◎	4	◎	4
家庭	家庭基礎	2	◎	1	◎	1	◎	1				
情報	社会と情報	2	◎	1	◎	1	◎	1				
課題探求型学習	探求基礎	1	◎	1								
	探求応用	1			◎	1	◎	1				
	探求発展	1							◎	1	◎	1
総合学習	総合的な学習の時間	3～6	◎	1	◎	1	◎	1	◎	1	◎	1
特活	LHR		◎	1	◎	1	◎	1	◎	1	◎	1
合計			34		34		34		34		34	

探求基礎・応用・発展はSGHの研究開発に係る学校設定教科・科目　　◎は必須　○は選択

□ＳＧＨ・ＳＳＨ研究開発組織図



平成 27 年度
スーパーグローバルハイスクール
研究開発実施報告書・第 1 年次
発行日　平成 28 年 3 月
発行者　学校法人札幌日本大学学園
札幌日本大学高等学校
校長　浅利　剛之
住　所　〒061-1103
北海道北広島市虹ヶ丘 5 丁目 7 番地 1
ＴＥＬ　011-375-2611　　ＦＡＸ　011-375-3305
印刷所　中西印刷株式会社